

『中辺分別論』及び『中辺分別論釈疏』第Ⅰ章「相品」 校訂テキスト及び翻訳研究(1)

北山祐誓

はじめに

本稿は、弥勒に帰される偈頌『中辺分別論頌』(*Madhyāntavibhāgākārikā*: MAV, 以下『中辺論頌』)及びそれに対する世親釈を含む『中辺分別論釈』(*Madhyāntavibhāgabhāṣya*: MAVBh, 以下『中辺論釈』)、並びに安慧による復注『中辺分別論釈疏』(*Madhyāntavibhāgaṭīkā*: MAVṬ, 以下『中辺論疏』)の梵文校訂テキスト及び翻訳を提示するものである。本稿では、『中辺論』第Ⅰ章「相品」(*Lakṣaṇapariccheda*)の中で「有・無の相」(*sadasallakṣaṇa*)を扱う。特にこの『中辺論頌』第Ⅰ偈は、瑜伽行派のみならず、後続の仏教諸学派の文献の中でもしばしば引用されることから、その重要性は窺い知れる。

従来、山口[1934](以下、山口本)による『中辺論疏』のテキスト校訂は、梵文写本にほぼ全葉にわたり三分の一程度の欠損が見られることも相まって、蔵文からの還梵部分を中心として、問題が多いことが知られる⁽¹⁾。

本稿では、還梵部分に関して、対応蔵文を『中辺論疏』のテキストデータベースで検索することで、同じ蔵文の用例を写本欠損部分以外の箇所から復元した。この作業により欠損前の写本により近い還梵テキストの作成を目指した。

『中辺論』第Ⅰ章を扱った最新の研究である小谷[2017]⁽²⁾でも、当該箇所のテキスト校訂が為されているが、そのような作業はあまり意識して行われていない。

⁽¹⁾ 『中辺論疏』の梵文校訂テキストに関する先行研究の詳細は、松岡[2006: 101–104]を参照されたい。

⁽²⁾ 小谷氏は同書本文中で、「山口本のチベット訳からの還元箇所については、諸訳の提起する還元案を校合したが、チベット訳の意味をさほど違えずに還元されていると判断される限り、サンスクリットの文章としては多少不自然かと思える場合も、筆者にそれらの当否を自信をもって判断する能力はないので、原則的には山口本をそのままに残した」という校訂方針を示している。

使用テキスト

本稿で使用する梵文校訂テキストは以下の通りである。

『中辺論釈』

- Na Nagao, Gadjin, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu), *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団, 1964.
- Ta Tatia, Nathmal & Thakur, Anantalal, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu), *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, K.P.Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.

『中辺論疏』

- Y Yamaguchi, Susumu, *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, 破塵閣, 1934; repr. 鈴木学術財団, 1966.
- Bh-T Bhattacharya, Vidhushekhara & Tucci, Giuseppe, *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣya-ṭīkā of Sthiramati: Being a Sub-commentary on Vasubandhu's Bhāṣya on the Madhyāntavibhāgasūtra of Maitreya-nātha Pt. 1*, Luzac & Co., London, 1932.
- Pa Pandeya, Ramchandra, *Madhyānta-vibhāga-śāstra: Countaining the Kārikā-s of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and ṭīkā by Sthiramati*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1971.
- Mi 三穂野英彦『Madhyāntavibhāga 第 1 章相品における理論と実践』Vol. II, 広島大学博士学位請求論文、2001 年。
- O 小谷信千代『虚妄分別とは何か—唯識説における言葉と世界—』法蔵館、2017 年。

現代語訳

本稿で和訳を提示する箇所に対する現代語訳には以下のものがある。

『中辺論』

長尾 [1976]、Kochumuttom[1982]、Anacker[1984]、三穂野 [2001b]

『中辺論疏』

山口 [1935]、Stcherbatsky[1936]、Friedmann[1937]、Stanley[1988]、小谷 [2017]

凡例

《梵文テキスト》

『中辺論』は長尾本、『中辺論疏』は山口本をそれぞれ底本とし、前者については Tatia 本、後者については Bhattacharya & Tucci 本、Pandeya 本も各々参照した。梵文写本も逐一参照した。先行研究同様、写本の欠損部分（蔵訳からの還元梵文箇所）は斜体で示し、対応する蔵文も同様に示した。写本の欠落箇所を蔵訳から補った際には、[] で括って示した。

『中辺論釈』が偈頌を引用する箇所は太字で示した。『中辺論疏』が偈頌を引用する箇所は、太字かつ下線で示し、『中辺論釈』を引用する場合には下線のみで示した。

/ 及び、の挿入・削除や avagraha の挿入、連声規則の標準化等は逐一注記しなかった。

なお、山口本の訂正表 (corrections) 及び山口 [1937] の Errata も逐一参照し校訂テキストに反映させているが、それらによる訂正は一々注記しなかった。

《蔵文テキスト》

『中辺論釈』、『中辺論疏』ともに、C・D・G・N・Pの五つの版本を校合し、最良と判断した読みを提示した。また、梵文テキストと対応する当該部分を、斜体・太字・下線で随時示した。脚注においても同様である。

《脚注について》

梵文校訂テキストの注記については、以下のような形式を取る。

山口本の読みを訂正した場合、採用した読みを] の左に示し、その直後に採用する刊本（または写本や蔵訳）、さらに訂正根拠となる『中辺論疏』のロケーション・梵文・蔵訳を cf. で示した。そして、: の後に採用しなかった、山口本及びその他の刊本の異読を記した。写本及び各版本、蔵訳の列挙順は、Ms、Y、Bh-T、Pa、O、Tib とした。

ロケーション

本稿で扱う部分の各ロケーションは以下の通りである。

『中辺論釈』

Skt [Ms1b3–6 Na17.15–18.7 Ta1.13–2.3]

Tib [C1b5–2a4 D1b4–2a3 G3a2–3b2 N2a3–2b5 P2a6–2b4]

Chi 『中邊分別論』 [T451a10–14]; 『辯中邊論』 [T464b10–15]

『中辺論疏』

Skt [Ms3b4–5a3 Y10.4–15.3 Bh-T9.12–13.13 Pa9.18–12.22]

Tib [C194a4–196b5 D193b4–196a5 G29b4–33a2 N22b5–25a6 P24b2–27b3]

本稿では、『中辺論釈』の梵文・蔵訳・梵文和訳、『中辺論疏』の梵文・蔵訳・梵文和訳の順に、相互参照できる形で提示した。

シノプシス

Madhyāntavibhāgaḥśya

1 虚妄分別

1.1 有と無の相 (sadasallakṣaṇa)

1.1.1 『中辺論頌』第1偈：虚妄分別における有と無

Madhyāntavibhāgaṭīkā

1 虚妄分別

1.1 有と無の相

1.1.1 『中辺論頌』第1偈の解釈

1.1.1.1 第一に相を説示する理由

1.1.1.2 第1偈の解釈(1)：中観派との対論

1.1.1.2.1 「一切法空」という経典の解釈をめぐって(第1偈ab句)

1.1.1.2.2 空性の存在性(第1偈c句)

1.1.1.2.3 虚妄分別に汚染された空性(第1偈d句)

1.1.1.3 第1偈の解釈(2)：説一切有部との対論

1.1.1.3.1 識以外に外界対象は存在しない(第1偈ab句)

1.1.1.3.2 外界対象が存在しなくても解脱は可能である(第1偈c句)

1.1.1.3.3 空性が虚妄分別において把握されない理由(第1偈d句)

1.1.1.4 第1偈の解釈(3)：中観派及び説一切有部両派との対論

1.1.1.4.1 中観派との対論(第1偈a句)

1.1.1.4.2 説一切有部との対論(第1偈b句)

1.1.1.4.3 中観派及び説一切有部両派との対論(第1偈c句)

1.1.1.4.4 解脱の努力の必要性について(第1偈d句)

1.1.1.5 第1偈の解釈(4)：雑染相及び清浄相について

1.1.1.5.1 第1偈a句を説示する理由

1.1.1.5.2 第1偈b句を説示する理由

1.1.1.5.3 第1偈c句を説示する理由

1.1.1.5.4 第1偈d句を説示する理由

1.1.2 『中辺論釈』第1偈の解釈

1.1.2.1 「虚妄分別」の語義解釈

1.1.2.1.1 第一解釈

1.1.2.1.2 第二解釈

1.1.2.2 「虚妄分別」の定義

1.1.2.2.1 一般的意味

1.1.2.2.2 個別的意味

1.1.2.3 虚妄分別と空性との関係

1.1.2.3.1 空性と所取・能取との関係

1.1.2.3.2 不顛倒なる空性の相

1.1.2.3.2.1 空性の定型句の解説

1.1.2.3.2.2 不顛倒なる空性の相に関する中観派及び説一切有部兩派との対論

Madhyāntavibhāgabhāṣya

MAVBh; Skt. [Ms1b3–5 Na17.15–18.7 Ta1.13–2.3]

tatra lakṣaṇam ārabhyāha /

abhūtaparikalpo 'sti dvayaṃ tatra na vidyate /

śūnyatā vidyate tv atra⁽³⁾ tasyām api sa vidyate //

[Na18] tatrābhūtapari_[1b4]**kalpo** grāhyagrāhakavikalpaḥ / **dvayaṃ** grāhyaṃ grāhakaṃ ca / **śūnyatā** tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā / **tasyām api sa vidyata** ity abhūtaparikalpaḥ / _[Ta2] evaṃ yad ya_[1b5]tra nāsti tat tena śūnyam iti yathābhūtaṃ samanupaśyati yat punar atrāvaśiṣṭaṃ bhavati tat sad ihāstīti yathābhūtaṃ prajānātīty aviparītaṃ śūnyatālakṣaṇam udbhāvitam bhavati //

MAVBh; Tib. [C1b5–2a4 D1b4–2a3 G3a2–3b2 N2a3–2b5 P2a6–2b4]

de la mtshan nyid⁽⁴⁾ las brtsams nas /

yang dag ma yin kun rtog _[P2b1] **yod /**

de la gnyis po yod ma _[C2a] **yin /**

stong pa nyid ni 'di la yod /

de la yang ni de yod do⁽⁵⁾ /

zhes bya ba gsungs _[N2b] so / de la **yang dag pa ma yin pa'i kun tu rtog pa'i** ni gzung ba dang _[D2a1] 'dzin par rnam par _[P2b2] rtog pa'o / **gnyis po** ni gzung ba dang 'dzin pa'i dngos po dang bral ba'o / **stong pa nyid ni** yang _[G3b] dag pa ma yin pa'i kun tu rtog pa de gzung ba dang 'dzin pa'i dngos po dang bral ba nyid do / **de la yang ni de yod do** _[P2b3] // zhes _[D2a2] bya ba ni yang dag pa ma yin pa kun tu rtog pa'o / de ltar gang na gang med pa de ni des stong par yang dag pa ji lta ba bzhin du yang dag par rjes su mthong ngo / 'di la lhag ma yod pa gang yin pa de ni 'dir yod _[P2b4] par yang dag pa ji lta ba bzhin du rab _[D2a3] tu shes te / de ltar stong pa nyid kyi mtshan nyid phyin ci ma log par bstan pa yin no /

⁽³⁾ tv atra] em. Na Ta : tv atatra Ms.

⁽⁴⁾ mtshan nyid C D N P : mtshan nyid dang G.

⁽⁵⁾ de yod do C D N P : yod do G.

1 虚妄分別

1.1 有と無の相 (sadasallakṣaṇa)

1.1.1 『中辺論頌』第1偈：虚妄分別における有と無

それ（本章に先立つ〈論の体〉で説かれた七つの主題）のうち、[最初に] 相について述べる。

虚妄分別はある。そこに二つのものは存在しない。

けれども、そこに空性は存在する。それ（空性）にはまたそれ（虚妄分別）が存在する。(I.1)こ[の偈]において、**虚妄分別**とは所取・能取を分別することである。**二つのもの**とは所取と能取とである。**空性**とは、その虚妄分別が所取・能取というあり方を離れていることである。**それにはまたそれが存在する**とは、[空性においても] 虚妄分別が[存在すること]である。

「XがYに存在しないとき、YはXという点で空である、とありのまま観察する。一方、まだここ（Y）に何らかの残されたもの（Z）があるならば、それ（Z）は存在するものとしてここ（Y）にある、とありのまま了知する」⁽⁶⁾。以上、空性の相が顛倒なく明らかに示されたのである。

⁽⁶⁾ BBh IV における『小空経』の引用に関しては、長尾 [1968] [1978b: 542–560]、向井 [1974]、水尾 [1983]、袴谷 [1984]、高橋 [2005] などを参照。

BBh^D 47.17–19, cf. 高橋 [2005: 166].

yad yatra na bhavati tat tena śūnyam iti samanupaśyati / yat punar atrāvaśiṣṭaṃ bhavati tat sad ihāstīti yathābhūtaṃ prajānāti /

あるもの（A）があるもの（B）において存在しない場合、それ（B）はそれ（A）に関して空であると正しく見る。しかし、あるもの（B）はここに残されている場合、それ（B）は存在するものとしてここにあるとありのままに理解する。（高橋訳）

上記のように、菩薩地の引用文に関して、高橋訳は一連の構文を三項目とは見做していない。

また、『小空経』のオリジナルのパーリ文は以下の通りである。

Majjhima-Nikāya 121 Cūlasuññatasuttanta 104.28–29, cf. 向井 [1974].

yam hi kho tattha na hoti, tena taṃ suññaṃ samanupassati, yam pana tattha avasiṭṭhaṃ hoti, taṃ santam idam athhīti pajānāti / evam assa esā, Ānanda, yathābhuccā avipallatthā parisuddhā suññatāvakkanti bhavati /

Madhyāntavibhāgaṭīkā

MAVṬ; Skt. [Ms3b4–5 Y10.4–8 Bh-T9.12–18 Pa9.18–24]

tatra lakṣaṇam ārabhyāha

abhūtaparikalpo 'sti dvayaṃ tatra na vidyate /śūnyatā vidyate tv atra tasyāṃ api sa vidyate //iti / tatreti lakṣaṇāvaraṇādi⁽⁷⁾-saptavastusu⁽⁸⁾ nirdiṣṭeṣu la_[3b5]kṣaṇam adhikṛtyoddiśyāha⁽⁹⁾ /abhūtaparikalpa⁽¹⁰⁾

ityādi / yathoddeśas tathā nirdeśa iti kṛtvā, lakṣaṇaṃ ca prāg uddiṣṭam, atas tasyaiva śeṣebhyo nirdeśaḥ prāg ārabhyate //

MAVṬ; Tib. [C194a4–6 D193b4–6 G29b4–6 N22b5–7 P24b2–5]

de la mtsan nyid las⁽¹¹⁾ brtsams nas /yang dag ma yin kun_[P24b3] rtog yod //de la gnyis po yod ma yin //stong pa nyid ni 'di la yod //de la yang ni de yod do //zhes bya bar_[D193b5] gsungs so zhes bya ba la / de la zhes bya ba ni mtshan nyid dang sgrib pa la sogs pa dngos po bdun smos_[P24b4] pa dag gi nang nas mtshan nyid las⁽¹²⁾ brtsams⁽¹³⁾ nas dbang du⁽¹⁴⁾ mdzad de / de'i phyir /yang dag ma yin kun rtog⁽¹⁵⁾ yod //ces bya ba la sogs pa gsungs so // ji ltar bstan_[D193b6] pa de bzhin du bshad de / thog mar mtshan nyid bstan_[P24b5] pas de'i phyir lhag ma rnams las⁽¹⁶⁾ de nyid bshad pa sngar brtsam mo //⁽⁷⁾ lakṣaṇāvaraṇādi Y Pa Mi O : lakṣaṇaṃ cāvṛtir ityādīnām ° Bh-T.⁽⁸⁾ °saptavastusu nirdiṣṭeṣu] cf. MAVṬ 3.13 saptavastusaṅgrahasya (dngos po bdun du bsdu pa) : °saptabhāvanirdiṣṭeṣu Y Mi O, uktānām saptānām arthānām madhye Bh-T, °saptārtheṣu nirdiṣṭeṣu Pa.⁽⁹⁾ adhikṛtyoddiśyāha Ms Y Pa Mi O : adhikṛtyāha Bh-T.⁽¹⁰⁾ abhūtaparikalpa Ms Bh-T St : abhūtaparikalpo 'sti Y Mi Pa O.⁽¹¹⁾ las C D : la G N P.⁽¹²⁾ las C D : la G N P.⁽¹³⁾ brtsams C G N P : brtsam D.⁽¹⁴⁾ dbang du G N P : de'i dbang du C D.⁽¹⁵⁾ rtog C D : rtogs G P, rtags N.⁽¹⁶⁾ las] em. : pas C D G N P.

1 虚妄分別

1.1 有と無の相

1.1.1 『中辺論頌』第1偈の解釈

1.1.1.1 第一に相を説示する理由

そ[の七つの主題]のそのうち、[最初に]相について述べる。

虚妄分別はある。そこに二つのものは存在しない。

けれども、そこに空性は存在する。それ（空性）にはまたそれ（虚妄分別）が存在する。

そのうちとは、相や障などの七つの主題（vastu）が説かれたうち⁽¹⁷⁾、[最初に]相を主題として、すなわち標示して⁽¹⁸⁾、

虚妄分別は (I.1a)

云々と言う。標示されている通りに[その]解説はあるから、最初に相が標示されているので、まさにそれ（相）について、[それ]以外のものよりも先に解説を開始するのである。

⁽¹⁷⁾ この「相や障などの七つの主題」とは、〈論の体〉で示された「七つの主題」（saptārtha）を指す。Cf. 拙稿[2018] saptārtha は通常 don bdun po という蔵訳が当てられているが、当該箇所では dngos po bdun となっている。これと同様の現象が帰敬偈（Abhyarcana）の部分に見られる。

MAVṬ 3.13–15, cf. 松岡[2007: 121].

asyeti triyānadvāreṇa saptavastusaṃgrahasya

(*'di ni zhes bya ba ni / theg pa gsum gyi sgo nas dngos po bdun du bsdu pa /*)

「この」(asya) というのに関して、三乗によって七つの主題を包括し、

また、当該箇所について、Bh-T は *saptānām arthānām* という選梵を提示している。さらに、三穗野[2003b: 81, n. 12] も *dngos po bdun smos pa dag gi* に対して *saptavastuṣu ukteṣu* という梵文が想定可能としている。

⁽¹⁸⁾ *adhikṛtyoddiśya* に相当する蔵訳は *brtsams nas dbang du mdzad de* であり、そのうち *adhikṛtya* は *brtsams nas* に、*uddiśya* は *dbang du mdzad de* に当たると思われる。*uddiśya* は MW によれば with reference to という意味が確認できるため、蔵訳は *adhikṛtya* を *uddiśya* と言い換えて *dbang du mdzad de* と翻訳した可能性がある。

MAVṬ; Skt. [Ms3b5–6 Y10.9–17 Bh-T9.19–24 Pa9.25–32]

kecid *manyante*⁽¹⁹⁾ *sarvadharmāḥ sarvathā niḥsvabhāvē*⁽²⁰⁾ *śaśaviśāṇavad iti / ataḥ*⁽²¹⁾
sarvāpavādapratīṣedhārtham āha,

abhūta_[3b6] **parikalpo 'sti,**

[iti] / svabhāvata iti vākyaśeṣaḥ / nanv evaṃ sūtravirodhaḥ sarvadharmāḥ śūnyā iti sūtre⁽²²⁾ vac-
 anāt / nāsti virodhaḥ, yasmād

dvayaṃ tatra na vidyate /

abhūtaparikalpo hi grāhyagrāhakasvabhāva⁽²³⁾-*rahitaḥ śūnya ucyate na tu sarvathā*⁽²⁴⁾
niḥsvabhāvē⁽²⁵⁾ / *ato*⁽²⁶⁾ *na sūtravirodhaḥ /*

MAVṬ; Tib. [C194a6–194b1 D193b6–194a1 P24b5–7 G29b6–30a2 N22b7–23a2 P24b5–7]

la la dag chos thams cad ri bong gi rwa⁽²⁷⁾ ltar rang bzhin ye med do // snyam du sems pa de'i
 phyir thams cad la skur ba dgag pa'i don du /

yang dag ma _[G30a] **yin kun** _[D193b7] **rtog** _[P24b6] **yod //**

ces bya bar⁽²⁸⁾ gsungs te / rang bzhin gyis⁽²⁹⁾ zhes _[N23a] bya ba tshig gi lhag ma'o // de ltar na mdo
 las chos thams cad stong pa'o zhes bshad pas / mdo dang 'gal⁽³⁰⁾ lam zhe na / mi 'gal te 'di ltar /

de la gnyis po yod ma _[P24b7] **yin //**

yang dag pa ma yin pa kun rtog pa _{[D194a1][C194b]} gzung ba dang 'dzin pa'i ngo bo dang bral bas
 stong pa zhes bya ba'i⁽³¹⁾ rang bzhin ye med pa ni ma yin te / de'i phyir mdo dang mi 'gal lo //

(19) *manyante*] Bh-T St cf. MAVṬ 28.24 kecid tu manyante (yang kha cig sems pa), MAVṬ 193.13 manyante (snyam du sems pa) : virundhanti Y Pa Mi O, vis° Ms.

(20) *niḥsvabhāvē* Y Pa Mi O : *vidyamānāḥ* Bh-T.

(21) *ataḥ* Y Pa Mi O : *tasmāt* Bh-T.

(22) sūtre Y Bh-T Mi O : śāstre Pa.

(23) grāhyagrāhakasvabhāva° cf. MAVṬ 218.12–13 grāhyagrāhakasvabhāva° (gzung ba dang 'dzin pa'i ngo bo nyid) : grāhyagrāhaka° Bh-T, grāhyagrāhakasvarūpa° Y Pa Mi O.

(24) śūnya ucyate na tu sarvathā Y Pa Mi O : śūnya iti na sarvathā Bh-T.

(25) *niḥsvabhāvē*] : *niḥsvabhāvaḥ* Y Pa Mi, *svabhāvato nāsti* Bh-T, *svabhāvo nāsti* O.

(26) *ato* Y Pa Mi O : *tasmān* Bh-T.

(27) rwa C D G P : ra N.

(28) ces bya bar C D : ces bya ba G N P.

(29) gyis] em. : gyi C D G N P.

(30) 'gal] em. : mi 'gal C D G N P.

(31) zhes bya ba'i C D : zhes bya'i G N P.

1.1.1.2 第1偈の解釈(1): 中観派との対論

1.1.1.2.1 「一切法空」という經典の解釈をめぐる(第1偈 ab 句)

ある者たち(中観派)は「一切法は兔の角のごとく、全く無自性である」と考える⁽³²⁾。それゆえ、一切[法]の損滅を否定するために、

虚妄分別はある (I.1a)

と言う。[ここでは]「自性として」という文言を補って[「虚妄分別は自性としてある」と理解すべき]である。

【反論】そのようなならば、經中に「一切法は空である」と説示されているので、經と矛盾するではないか。

【答論】いや、矛盾はない。なぜなら、

そこに二つのものは存在しない (I.1b)

からである。実に、虚妄分別は所取・能取という自性を欠いているという点で⁽³³⁾空と言われるが、[一切法は]全く無自性であるということではない⁽³⁴⁾。それゆえ經典と矛盾しないのである。

⁽³²⁾ 写本は vis-と読み取れるが、他の箇所用例を根拠として Bh-T の還梵を採用し、manyante と再校訂した。Stanley もこれを支持している。

⁽³³⁾ 三穂野 [2007: 83, n. 20] では、grāhyagrāhakasvarūparāhityena あるいは grāhyagrāhakasvarūparahitvena という梵文を想定している。しかしながら、当該の藏訳 dang bral bas の用例からそのような梵文は回収できない。

⁽³⁴⁾ 「全く無自性ではない」の主語は、文脈上「一切法」であると考え、さらに中観派による「一切法は兔の角のごとく、全く無自性である」(sarvadharmāḥ sarvathā niḥsvabhāvāḥ) の主張や、複数形の表現が回収できる經典の文言(「一切法は空である」sarvadharmāḥ śūnyā)に基づいて、niḥsvabhāvāḥという複数形を想定して訳出した。

MAVṬ; Skt. [Ms3b6–8 Y10.17–11.9 Bh-T9.25–10.8 Pa9.32–10.7]

*yady evaṃ dva*_[3b7] *yaṃ śaśaviṣāṇavat sarvathā nāsti, abhūtaparikalpa*⁽³⁵⁾ *ca paramārthataḥ* _[Bh–T10] *svabhāvato 'sty evaṃ śūnyatābhāvaprasaṅgaḥ / naitad evaṃ yasmāc*

[Y11][Pa10] **chūnyatā vidyate tv atra,**

iyam eva hi śūnyatā yā grāhyagrāhakarāhitatābhūtaparikalpasyeti⁽³⁶⁾ *na śūnyatābhāvaprasaṅgaḥ*⁽³⁷⁾ */ yady advayā*⁽³⁸⁾ *śūnyatā sā cābhūtaparikalpe vidyate*⁽³⁹⁾, *kasmād vayam*⁽⁴⁰⁾ *na* _[3b8] *muktāḥ*⁽⁴¹⁾, *vidyamānā ca kasmān na grhyate*⁽⁴²⁾ *iti saṃśayāpanayanārtham*

tasyām api sa vidyate //

ity āha / yasmāc chūnyatāyām apy abhūtaparikalpo vidyate tasmād bhavanto na muktāḥ / ata eva ca samalatvān na prasannābdhātuvad⁽⁴³⁾ *grahaṇam*⁽⁴⁴⁾ /

MAVṬ; Tib. [C194b1–4 D194a1–4 G30a2–6 N23a2–5 P24b7–25a3]

gal te de ltar gnyis po ni ri bong gi rwa⁽⁴⁵⁾ *ltar ye* _[P24b8] *med la / yang dag pa ma yin pa kun tu rtog pa ni / don dam par rang* _[D194a2] *bzhin gyis*⁽⁴⁶⁾ *yod na / de lta na ni stong pa nyid med par 'gyur ro zhe na / de ni de lta*⁽⁴⁷⁾ *ma yin te 'di ltar /*

stong pa nyid ni 'di la yod //

yang dag ma yin pa _[P25a1] *kun rtog pa la gzung ba dang 'dzin pa med pa nyid gang yin pa de stong pa nyid yin pas stong pa nyid med par mi 'gyur ro //* _[D194a3] *gal te gnyis po med pa stong pa nyid yin la / de yang yang dag pa ma* _[P25a2] *yin pa kun tu*⁽⁴⁸⁾ *rtog pa la yod na / ci'i phyir bdag cag ma grol / yod na yang ci'i phyir ma rtogs snyam pa'i dogs pa bsal ba'i phyir /*

de la yang ni de yod do //

zhes bya ba gsungs te / 'di ltar stong _[D194a4] *pa nyid la yang* _[P25a3] *dag pa*⁽⁴⁹⁾ *ma yin pa kun rtog pa yod pas de'i phyir khyed ma grol lo //* *de bas na dri ma dang bcas pas chu'i khamdang ba*⁽⁵⁰⁾ *bzhin rtogs*⁽⁵¹⁾ *par mi rung ngo //*

⁽³⁵⁾ abhūtaparikalpaś Ms Y Pa Mi O : abhūtakalpaś Bh-T.

⁽³⁶⁾ °bhūtaparikalpasyeti] Pa : °bhūtaparikalpa iti Y Bh-T Mi O, cf. Tib (yang dag ma yin pa kun rtog pa la).

⁽³⁷⁾ na śūnyatābhāvaprasaṅgaḥ] cf. MAVṬ 10.19 śūnyatābhāvaprasaṅgaḥ (stong pa nyid med par 'gyur ro) : nāstitvaṃ bhavati Y, na śūnyatā na vidyate Bh-T, na śūnyatāyā nāstitvaṃ bhavati Pa.

⁽³⁸⁾ dvayābhāva] : advayā Y Bh-T Pa Mi O. cf. MAVṬ 126.8–9 yatas tatra dvayābhāvaḥ pariniṣpanna eva, na tu dvayābhāva eva pariniṣpanna ('di ltar de la gnyis po med pa ni yongs su grub pa nyid de / gnyis po med pa nyid yongs su grub pa).

⁽³⁹⁾ vidyate] Bh-T : 'sti Y Pa Mi O.

⁽⁴⁰⁾ kasmād vayam Y Pa Mi O : kim iti vayam Bh-T.

⁽⁴¹⁾ na muktāḥ] Bh-T : amuktāḥ Y Pa Mi O.

⁽⁴²⁾ grhyate] cf. NC : grhṇata Ms Y Pa Bh-T.

⁽⁴³⁾ na prasannābdhātuvad Y Mi O : na prasannābdhātuvad Pa, : nābdhātuprasādadav Bh-T.

⁽⁴⁴⁾ grahaṇam] cf. MAVṬ 14.9 °grahaṇam (rtogs par mi rung ngo) : avagantum yuktam Y Mi O, grhyate Pa, grahaṇam yuktam Bh-T.

⁽⁴⁵⁾ rwa C D G P : ra N.

⁽⁴⁶⁾ gyis C D : gyi G N P.

⁽⁴⁷⁾ lta C D N : ltar G P.

⁽⁴⁸⁾ kun tu C D : kun G N P.

⁽⁴⁹⁾ yang dag pa D : yang yang dag pa C G N P.

⁽⁵⁰⁾ dang ba G N P : dangs ba C D.

⁽⁵¹⁾ rtogs C D N P : rtog G.

1.1.1.2.2 空性の存在性（第 1 偈 c 句）

【反論】もしこのように「所取・能取という」二つのものが兎の角のごとく全くなく、また虚妄分別が勝義的に自性としてあるならば、空性が存在しないという過失となってしまう。

【答論】いや、こ「の議論」はそのような「過失とは」ならない。なぜなら、

けれども、そこに空性は存在する (I.1c)

からである。実に、虚妄分別が所取・能取を欠いていることという、このことこそが空性であるから、空性が存在しないという過失とはならない。

1.1.1.2.3 虚妄分別に汚染された空性（第 1 偈 d 句）

【反論】もし「所取・能取という」二つのものがないこと⁽⁵²⁾が空性であり、それが虚妄分別においてあるのであれば、どうしてわれわれは解脱していないのか。また、どうして存在しているにも関わらず「空性を」把握しないのか。

【答論】以上のような疑念を取り除くために、

それ（空性）にはまたそれ（虚妄分別）が存在する (I.1d)

と言う。空性にも虚妄分別が存在するから、あなたたちは解脱していないのである。そして、まさにそれゆえ「空性は」、[虚妄分別という] 汚れを伴うものであるから、清浄な水界のように⁽⁵³⁾ 把握されないのである。

⁽⁵²⁾ この文脈で、*advayā* という女性形は不自然と思われるため、他の用例で確認できる *dvayābhavaḥ* という男性形を想定し訳出した。

⁽⁵³⁾ 『中辺論』第 16 偈 cd 句において、同様の譬喩が見られる。

MAVBh ad I.16cd 24.10–13, cf. 三穂野 [2001b: 53].

yadi samalā bhūtvā nirmalā bhavati katham vikāradharminītvād anityā na bhavati / yasmād asyāḥ,

abdhātukanakākāśāsuddhivac chuddhir iṣyate // I.16cd

āgantukamalāpagamān na tu tasyāḥ svabhāvānyatvaṃ bhavati /

もし「空性が」汚れを伴うものであったり、汚れを離れたものであったりするならば、変化するという性質を持つものであるのに、どうして「空性は」無常なものとならないのか。[そうではなくて、] なぜなら、それ（空性）は、

水界や黄金、虚空が清浄であるのと同じように、清浄であると認められる。(I.16cd)

客塵を離れるからであって、それ（空性）の自性に「本質上に」差異があるのではない。

MAVṬ; Skt. [Ms3b8–4a2 Y11.10–19 Bh-T10.9–16 Pa10.7–14]

atha vā cittaṃ caittasikā rūpaṃ ca dravyataḥ santīti⁽⁵⁴⁾ *yeṣāṃ dṛṣṭis teṣāṃ pratiśedhārtham*⁽⁵⁵⁾ *āha*⁽⁵⁶⁾,

[4a1] **abhūtaparikalpo** [⁵⁷sti]
[iti / sa evāsti]⁽⁵⁷⁾ dravyataḥ⁽⁵⁸⁾ / nāsti rūpaṃ tadvyatiriktam dravyata⁽⁵⁹⁾ iti / kiṃ kāraṇam / yasmād
dvayam tatra na vidyate /

na hy abhūtaparikalpaḥ kasyacid grāhako nāpi kenacit gṛhyate, kiṃ tarhi, grāhyagrāhakarāhita-
vastumātram⁽⁶⁰⁾ *eva / tathā hi*⁽⁶¹⁾ *vijñānād bahi*⁽⁶²⁾ *rūpādayo na gṛhyante*⁽⁶³⁾ *svapnādān iva*⁽⁶⁴⁾ *vijñānam*⁽⁶⁵⁾ *rūpādyā*_[4a2] bhāsam utpadyate /

MAVṬ; Tib. [C194b4–7 D194a4–7 G30a6–30b2 N23a5–7 P25a3–6]

yang na sems dang sems las byung ba rnam dang⁽⁶⁶⁾ / *gzugs* _[P25a4] *dang rdzas nyid du yod par*
gang dag lta ba de dgag _[D194a5] *pa'i phyir* /

yang dag ma yin kun rtog yod⁽⁶⁷⁾ //

ces gsungs te de nyid rdzas su yod do // *gzugs ni de las logs shig na yang med* _[G30b] *la / rdzas su*
yang⁽⁶⁸⁾ *med do* // *ci'i* _[P25a5] *phyir zhe na / 'di ltar*

de la gnyis po yod ma yin /

yang dag pa ma yin pa kun rtog pa ni ci la yang _[D194a6] *'dzin pa ma yin / sus kyang gzung bar*⁽⁶⁹⁾
bya ba ma yin gyi / gzung ba dang 'dzin pa dang bral ba'i dngos po tsaṃ _[P25a6] *nyid de / 'di ltar*
rnam par shes pa las phyi rol na gzugs la sogs pa gzung ba med par rmi lam la sogs pa bzhin du /
gzugs la sogs par snang ba'i rnam _[D194a7] *par shes pa 'byung ngo* //

⁽⁵⁴⁾ *cittaṃ caittasikā rūpaṃ ca dravyataḥ santīti* : *cittaṃ caittasikam ca rūpaṃ ca dravyato 'stīti* St, *cittacaittasikā rūpato dravyataḥ ca santīti* Bh-T Mi cf. Tib (yang na sems dang sems las byung ba rnam dang / gzugs dang rdzas nyid du yod par), *cittacaittebhyo 'nyatra rūpādayo dravyatvena santīti* Y Pa, *cittacaittebhyo 'nyatra rūpādayo dravyatvena santīti* O.

⁽⁵⁵⁾ *yeṣāṃ dṛṣṭis teṣāṃ pratiśedhārtham* Bh-T Mi : *yeṣāṃ darśanam tatpratiśedhārtham* Y St, *yad darśanan tatpratiśedhārtham* O.

⁽⁵⁶⁾ *āha* Y Pa Mi O : *uktam* Bh-T.

⁽⁵⁷⁾ [iti / sa evāsti] Y Pa Mi O : [⁵⁷sti iti tasmād] asti Bh-T.

⁽⁵⁸⁾ dravyataḥ Y Bh-T Pa Mi O : dravyanta Ms.

⁽⁵⁹⁾ dravyata] Ms : [nāsti] dravyata Bh-T Y Pa Mi.

⁽⁶⁰⁾ grāhyagrāhakarāhitavastumātram] Tib (gzung ba dang 'dzin pa dang bral ba'i dngos po tsaṃ nyid de) : grāhyagrāhakarāhitam vastumātram Mi, grāhyagrāhatvarāhitam vastumātram Bh-T, grāhyagrāhakarāhitam bhāvamātram Y O.

⁽⁶¹⁾ *tathā hi*] Bh-T Tib ('di ltar) : *yato* Y Mi Pa O.

⁽⁶²⁾ *bahi*] Pa Mi O : *bāhye* Y, *bahir* Bh-T.

⁽⁶³⁾ *rūpādayo na gṛhyante* Y Pa Mi O : *na rūpādi na gṛhyate* Bh-T.

⁽⁶⁴⁾ *svapnādān iva*] Tib (*rmi lam la sogs pa bzhin du*) Mi cf. MAVṬ 11.21 *svapnādān iva* (*rmi lam la sogs pa bzhin no*) : *svapnādivad* Y Bh-T O.

⁽⁶⁵⁾ *vijñānam* Y Pa Mi O : *vijñānam hi* Bh-T.

⁽⁶⁶⁾ rnam dang C D : rnam so G N P.

⁽⁶⁷⁾ ma yin kun rtog yod C D : ma yin pa kun yod G N P.

⁽⁶⁸⁾ yang C D G N : yod P.

⁽⁶⁹⁾ gzung bar C D G N : bzung bar P.

1.1.1.3 第1偈の解釈(2)：説一切有部との対論

1.1.1.3.1 識以外に外界対象は存在しない(第1偈 ab 句)

あるいはまた、「諸々の心・心所や色は実体として存在する」⁽⁷⁰⁾と[主張]する者たち(説一切有部)の見解を否定するために、

虚妄分別はある(I.1a)

と[言う]。それこそが実体として存在するのである。それ(虚妄分別)と異なるものである色が実体として存在することはない⁽⁷¹⁾。

【反論】なぜか。

【答論】

そこに二つのものは存在しない(I.1b)

からである。実に、虚妄分別はいかなるものも把握することなく、またいかなるものによっても把握されることもなくて、所取・能取を欠いている〈実事のみ〉(vastumātra)に他ならないからである⁽⁷²⁾。すなわち、識の他に色などは把握されず、夢などの場合と同様に、色などとして顕現する識が生じるのである。

⁽⁷⁰⁾ 山口本の還梵に従うと「諸々の心・心所とは別に、色形などが実体として存在する」となる。Stcherbatsky や小谷もこの読みを支持する。しかしながら、山口本は当該の蔵訳を... *sems dang sems las byung ba rnam las gzhan du gzugs la sogs pa rdzas nyid du ...* と読み変えて還梵を提示している。ここでは、主語は心と心所と色とであると考え、*cittaṃ caittasikā rūpaṃ ca dravyataḥ santi* という還元を提示し、これに基づいて訳出した。Stanley はこの理解を支持している。一方、Bh-T や三穂野は蔵訳に従って、心と心所と色と実体とを並列的に主語を補い副詞として理解している。三穂野は、「[一切が] 諸々の心と心作用や、色形や実体として存在する」と翻訳している。

⁽⁷¹⁾ 当該の蔵訳 (*gzugs ni de las logs shig na yang med la // rdzas su yang med do //*) を訳すと以下ようになる。「色はそれ(虚妄分別)とは異なるものとしても存在せず、実体として[も]存在しない」。

⁽⁷²⁾ 周知のように、vastumātra はすでに「菩薩地」に用いられる術語である。『中辺論』の当該箇所では、それを明確に「所取・能取を欠いた〈実事のみ〉」と虚妄分別そのものとを等値している。

BBh^D32.13–21, BBh^W47.20–48.6.

tadyathā rūpādisaṃjñake yathā nirdiṣṭe vastuni rūpaṃ ity evamādi prajñāptivādātmako dharmo nāsti / atas tadrūpādisaṃjñakam vastu tena rūpaṃ ity evamādi prajñāptivādātmanā śūnyam / kiṃ punas tatra rūpādisaṃjñake vastuny avasiṣṭam / yad uta tad eva rūpaṃ ity evamādi prajñāptivādāśrayaḥ / tac cobhayam yathābhūtaṃ prajānāti yad uta vastumātraṃ ca vidyamānaṃ vastumātre ca prajñāptimātraṃ ca cāsadbhūtaṃ samāropayati / na bhūtaṃ apavadata nādhikaṃ karoti na nyūnikaroti notkṣipati na pratikṣipati / yathābhūtaṃ ca tathatān nirabhilāpya-svabhāvatām yathābhūtaṃ prajānāti / iyam ucyate sugrhitā śūnyatā samyak prajñayā supratividdheti /

MAVṬ; Skt. [Ms4a2–3 Y11.19–24 Bh-T10.16–20 Pa10.14–17]

na ca yady asya⁽⁷³⁾ kāraṇaṃ tadabhāve tasyotpattir yujyate / tasmān nirāmbanam eva svapnādāv iva / anyatrāpi svabījaparipākād arthābhāsaṃ vijñānam utpadyata ity avaseyam⁽⁷⁴⁾ / grāhyābhāve grāhakasyābhāvād grāhye 'sati⁽⁷⁵⁾ grāhako bhavitum⁽⁷⁶⁾ na yujyate / atas⁽⁷⁷⁾ na rūpam abhūtaparikalpāt prthag asti⁽⁷⁸⁾ [4a3] /

MAVṬ; Tib. [C194b7–195a1 D194a7–194b1 G30b2–4 N23a7–23b2 P25a6–8]

gal te rgyu yin na de [P25a7] med par de 'byung bar mi rung ngo // [N23b] de'i phyir dmigs pa med pa nyid de / rmi⁽⁷⁹⁾ lam la sogs pa bzhin no // gzhan la yang rang gi sa bon yongs su smin pa las don du snang ba'i rnam par shes pa 'byung bar shes par [P25a8] bya'o // [C195a][D194b1] gzung ba med na 'dzin pa med par⁽⁸⁰⁾ 'gyur bas gzung ba med na 'dzin pa yod par⁽⁸¹⁾ mi rung ste / de bas na gzugs ni yang dag pa ma yin pa kun tu⁽⁸²⁾ rtog pa las gud na yod pa ma yin no //

(73) Tib n.e.

(74) avaseyam Ms Y Pa O : jñeyam Bh-T Mi Tib (shes par bya'o).

(75) grāhakasyābhāvād grāhye 'sati Y Pa Mi O : grāhako na bhavatīti grāhyābhāve Bh-T.

(76) grāhako bhavitum Pa Mi O : grāhako 'stum Y : grāhakabhāvo Bh-T.

(77) atas Bh-T Tib (de bas na) : tasmān Y Pa Mi O.

(78) na rūpam abhūtaparikalpāt prthag asti Y Pa Mi O : ato rūpam abhūtaparikalpān na prthagbhūtaṃ Bh-T .

(79) rmi G N P : da rmi C D.

(80) med par D G N P : mad par C.

(81) yod par C D : med par G N P.

(82) kun tu C D : kun G N P.

また、もし「色などが」これ（識）の因であるならば、それ（色など）が存在しないとき、それ（識）の生起は不合理である。したがって、夢などの場合と同様に、「識は色などの」対象を持たないのである。「夢などの場合」以外でも自身の種子が成熟するので、対象として顕現する識が生じると判断するべきである。所取が存在しないときに能取は存在しないので、所取が存在しないにも関わらず、能取が存在することは不合理である。それゆえ⁽⁸³⁾、色は虚妄分別と別に存在することはない。

⁽⁸³⁾ 直前の文脈に *tasmāt* が見られ、そこでは梵文が回収可能であり蔵訳は *de'i phyir* となっている。そのため、当該部分は蔵訳者が *tasmāt* と訳し分けていると考えて、*tasmāt* ではなく *atas* という還梵を採用した。

MAVṬ; Skt. [Ms4a3–4 Y11.24–12.7 Bh-T10.20–11.2 Pa10.17–24]

yadi tarhi grāhyābhāvas tena viśuddhyālambanābhāvān⁽⁸⁴⁾ mokṣābhāvaḥ / naitad evaṃ yasmāt,

[Y12] śūnyatā vidyate tv atra /

tuśabdo yasmādarthaḥ / śūnyatā hi viśuddhyālambanam⁽⁸⁵⁾, sā ca grāhyagrāhakarāhitatābhūta-
praikalpe 'stīti na mokṣābhāvaḥ⁽⁸⁶⁾ /

yady abhūtaparikalpe 'sti sā⁽⁸⁷⁾ vi_[4a4]dyamānā kimarthaṃ na gr̥hyate / abhūtaparikalpāvr̥tatvān
na gr̥hyata [Bh–T11] ākāśanairmalyavat⁽⁸⁸⁾, na tv asattvād iti pratipādayann āha

tasyām api sa vidyata

iti //

MAVṬ; Tib. [C195a1–4 D194b1–4 G30b4–31a1 N23b2–4 P25a8–25b4]

gal te gzung ba [P25b1] med na de'i phyir rnam par dag pa'i dmigs pa med pas thar pa yang med
par [D194b2] 'gyur ro zhe na / de ni de lta ma yin te / 'di ltar /

stong pa nyid ni 'di la yod //

ni zhes bya ba'i sgra⁽⁸⁹⁾ ni gang gi phyir zhes bya ba'i tha tshig go // [P25b2] stong pa nyid ni rnam
par dag pa'i dmigs pa ste / gzung ba dang 'dzin pa dang bral ba nyid de / de yang yang dag pa⁽⁹⁰⁾
ma yin pa kun rtog pa la yod [D194b3] pas thar pa med par mi 'gyur ro //

gal te yang dag pa ma [P25b3] yin pa kun⁽⁹¹⁾ rtog pa la yod na / de yod pas ci'i phyir mi rtogs she
na / yang dag pa ma yin pa kun rtog pas⁽⁹²⁾ bsgribs pas nam mkha'i⁽⁹³⁾ dri ma med pa bzhin du
rtogs par mi rung gi med [G31a] pa ni ma yin no zhes [P25b4] bstan pa'i [194b4] phyir /

de la yang ni de yod do

zhes bya ba gsungs so //

⁽⁸⁴⁾ viśuddhyālambanābhāvān Y Pa O : viśuddhālambanābhāvān Bh-T Mi.

⁽⁸⁵⁾ viśuddhyālambanam Ms cf. NC, viśuddhālambanam Bh-T Mi, viśuddhyālambanā Y Pa.

⁽⁸⁶⁾ sā ca grāhyagrāhakarāhitatābhūtapraikalpe 'stīti na mokṣābhāvaḥ Y Pa Mi O : sā ca grāhyagrāhakarāhitatā / sā
cābhūtapraikalpe vidyata iti na mokṣābhāvaḥ Bh-T.

⁽⁸⁷⁾ yady abhūtaparikalpe 'sti sā Y Pa Mi O : yady tarhi sābhūtaparikalpe vidyate Bh-T.

⁽⁸⁸⁾ °nairmalyavat Ms Bh-T Mi O cf. NC : °nairmālyavat Y.

⁽⁸⁹⁾ sgra C D G N : sgri P.

⁽⁹⁰⁾ yang dag pa C D : yang dag par G N P.

⁽⁹¹⁾ kun G N P : kun tu C D.

⁽⁹²⁾ rtog pas C D G : rtogs pas N P.

⁽⁹³⁾ nam mkha'i P : nam mkha' C D, nam kha' G N.

1.1.1.3.2 外界対象が存在しなくても解脱は可能である（第1偈c句）

【反論】そうすると、もし所取が存在しないならば、浄化の対象 (viśuddhyāmbana)⁽⁹⁴⁾ が存在しないことになるので、解脱が存在しない [ことになってしまう]。

【答論】そのようなことはない。なぜなら、

けれども、そこに空性は存在する (I.1c)

からである。「けれども」という語は、「なぜなら」という意味である。実に、[汚れを伴った] 空性は浄化の対象であって、またそれ（空性）、すなわち所取・能取を欠くことが、虚妄分別においてあるから、解脱が存在しないのではない。

1.1.1.3.3 空性が虚妄分別において把握されない理由（第1偈d句）

【反論】もし虚妄分別において [空性が] あるならば、どうしてそれ（空性）は存在しているにも関わらず把握されないのか。

【答論】[空性は] 虚妄分別で覆われているから、虚空の無垢性のように把握されないが、[空性が] 存在しないから [把握されないの] ではないということを示すために、

それ（空性）にもまたそれ（虚妄分別）が存在する (I.1d)

と言う。

⁽⁹⁴⁾ viśuddhyāmbana あるいは viśuddhāmbana の複合語解釈に関する、先行研究の見解については以下の通りである。Cf. 小谷 [2018: 240, n. 26]

viśuddhyāmbana (Bv.)

山口「空性は清浄の所縁あるものなり」

Friedmann: the Non-Substantiality is based on purification.

viśuddhyāmbana (Tp.)

Stanley: emptiness is the objective support of purity.

小谷「清浄 [を獲得するため] の所縁」

viśuddhāmbana (Kdh.)

三穂野「空性は清浄なる所縁であり」

ここでは以下の、viśuddhyāmbana の語義解釈が為されている用例に基づいて、Tp. として理解した。

MAVṬ 46.11 śūnyatāyā viśuddhyāmbanatvena niścitatvāt.

MAVṬ 49.6 viśodhyārtham āmbanaṃ viśuddhyāmbanam.

MAVṬ; Skt. [Ms4a4–5 Y12.8–15 Bh-T11.3–9 Pa10.24–11.6]

atha vā sarvāpavādapraṭiṣedhārtham āha,

[Pa11] **abhūtaparikalpo 'sti,**

iti⁽⁹⁵⁾ / na sarvam asan nāpi sadātmakam vijñānapa_[4a5] rināmātmanā astīti kṛtvā /

ye tu manyante yathaiva rūpādayaḥ prakhyāyante tathaivābhūtaparikalpāt⁽⁹⁶⁾ svabhāvataḥ prthag vidyanta iti tāt pratyāha, abhūtasamāropapraṭiṣedhārtham⁽⁹⁷⁾

dvayam tatra na vidyate /

iti / abhūtaparikalpamātram astīty⁽⁹⁸⁾ abhiprāyaḥ /

MAVṬ; Tib. [C195a4–6 D194b4–6 G31a1–3 N23b4–6 P25b4–7]

yang na thams cad la skur ba 'debs pa dgag pa'i phyir //

yang dag ma yin kun rtog yod //

ces bya ba gsungs te / rnam par shes pa gyur ba'i_[P25b5] bdag nyid yod pas / thams cad med pa yang ma yin bdag nyid yod pa_[194b5] yang ma yin no //

gang dag sems pa⁽⁹⁹⁾ gzugs la sogs pa ji ltar snang ba de ltar yang dag pa ma yin pa kun rtog pa las logs_[P25b6] shig na rang bzhin du yod do zhes / yod pa ma yin pa la sgro 'dogs pa dgag pa'i don du de'i phyir //

de la gnyis po yod ma yin //

zhes bya ba_[D194b6] gsungs so // yang dag pa ma yin pa kun rtog pa tsam yod_[P25b7] par dgongs pa'o //

(95) °pratiṣedhārtham āha ... iti Y Pa Mi O : °pratiṣedhārtham ... ity āha Bh-T.

(96) °parikalpāt Ms Y Pa Mi O : °parikalpāḥ Bh-T.

(97) abhūtasamāropapra° Y Bh-T Pa Mi O, abhūtasamāropaḥ ḍa° Ms (Y reads Ms as “abhūtasamāropaḥ pra°”).

(98) astīty] Bh-T : vidyata ity Y Pa Mi O.

(99) sems pa C D : sems la G N P.

1.1.1.4 第1偈の解釈(3)：中観派及び説一切有部との対論

1.1.1.4.1 中観派との対論（第1偈a句）

あるいはまた、一切〔法〕の損減を否定するために、

虚妄分別はある (I.1a)

と言う。識転変を本質とするものとして存在するから、一切〔法〕は存在しないのでもなく、存在を本質とするものでもない⁽¹⁰⁰⁾。

1.1.1.4.2 説一切有部との対論（第1偈b句）

一方、色などが顕現している通りに、虚妄分別とは別に自性として存在すると考える者たち（説一切有部）に対して、虚妄〔なる所取・能取〕の増益を否定するために、

そこに二つのものは存在しない (I.1b)

と言う。[ここでは] ただ虚妄分別のみが存在するということが意図されている。

⁽¹⁰⁰⁾ 蔵訳は「また本質が存在するのでもない (bdag nyid yod pa yang ma yin no //)」と訳している。

MAVṬ; Skt. [Ms4a5–7 Y12.15–25 Bh-T11.9–16 Pa11.6–14]

kaiścid⁽¹⁰¹⁾ *dvayā*_[4a6] *bhāvo*⁽¹⁰²⁾ *vandhyāputravād ucchedarūpo*⁽¹⁰³⁾ *grhyate*, *anyair antar-vyāpārapuruṣarahitatā dharmānām śūnyatety ucyate* / *ataḥ śūnyatāpavādapraṭiṣedhārthaṃ bhūtanairātmyakhyāpanārthaṃ cāha*

śūnyatā vidyate tv atra,

*iti / yady abhūtaparikalpe śūnyatāsty evaṃ sati sarvaprāṇinām aprayatnena mokṣapra*_[4a7] *saṅ-*
gaḥ⁽¹⁰⁴⁾ / *nāsty etad yasmāt*,

tasyām api sa vidyate /

na hy aviśodhitāyām śūnyatāyām⁽¹⁰⁵⁾ *mokṣo* 'sti *saṃkṛṣṭā*⁽¹⁰⁶⁾ *ca mahatā yatnena viśodhyata iti nāsty ayatnena mokṣaḥ* /

MAVṬ; Tib. [C195a6–195b2 D194b6–195a2 G31a3–6 N23b6–24a2 P25b7–26a2]

kha cig⁽¹⁰⁷⁾ *gnyis po med pa ni*⁽¹⁰⁸⁾ *mo gsham*⁽¹⁰⁹⁾ *gyi bu bzhin du dngos po med do*⁽¹¹⁰⁾ *zhes chad pa'i dngos po'i*⁽¹¹¹⁾ *ngo bor 'dzin pa dang / gzhan dag nang na byed pa'i skyes bu med pa nyid ni / chos rnams kyi stong pa nyid* _[P25b8] *do* _[D194b7] *zhes smra ba de'i phyir / stong pa nyid du*⁽¹¹²⁾ *skur ba 'debs pa dgag pa'i don dang / bdag med pa yang dag* _[N24a] *par bstan pa'i phyir /*

stong pa nyid ni 'di la yod

ces bya ba gsungs so // gal te yang dag _[P26a1] *pa ma yin pa kun rtog pa la stong pa nyid yod na de lta na ni / bsgrim mi dgos* _{[C195b][D195a1]} *par srog chags thams cad thar par 'gyur ro zhe na / de lta ma yin te 'di ltar /*

de la yang ni de yod do //

_[P26a2] *stong pa nyid kyang rnam par ma sbyangs*⁽¹¹³⁾ *kyi bar du thar pa med pa'i phyir te / kun nas nyon mongs par gyur pa ni / 'bad pa chen pos rnam par sbyangs*⁽¹¹⁴⁾ *dgos* _[D195a2] *pas 'bad pa ma byas par thar pa med do //*

⁽¹⁰¹⁾ *kaiścid*] Bh-T Mi O : *kena cid* Y Pa.

⁽¹⁰²⁾ *dvayābhāvo*] : *dvayam abhāvo* Y Mi, *dvayor abhāvo* Bh-T Pa O.

⁽¹⁰³⁾ *vandhyāputravād ucchedarūpo* Ms Bh-T Mi Pa O cf. NC : *vandhyāputravac chedarūpo* Y.

⁽¹⁰⁴⁾ *śūnyatāsty evaṃ sati sarvaprāṇinām aprayatnena mokṣaprasaṅgaḥ* Y Pa Mi O : *śūnyatā syād evaṃ sarveṣāṃ jivānām ayatnena mokṣaprasaṅgaḥ* Bh-T.

⁽¹⁰⁵⁾ *aviśodhitāyām śūnyatāyām* Ms Y Pa Mi O : *aviśodhitāyām* Bh-T.

⁽¹⁰⁶⁾ *saṃkṛṣṭā*] Ms Bh-T : *saṃkṛṣṭāś* Y Pa Mi O.

⁽¹⁰⁷⁾ *kha cig* C D G : *kha gcig* N P.

⁽¹⁰⁸⁾ *gnyis po med pa ni* C D : *gnyis po* G N P.

⁽¹⁰⁹⁾ *gsham* C D N P : *bsham* G.

⁽¹¹⁰⁾ *med do* G N P : *med de* C D.

⁽¹¹¹⁾ *chad pa'i dngos po'i* C D : *tshad ma'i* G N P.

⁽¹¹²⁾ *du* D N : *la* C G P.

⁽¹¹³⁾ *sbyangs* C D G : *sbyang* N P.

⁽¹¹⁴⁾ *sbyangs* P : *sbyang* C D G N.

1.1.1.4.3 中観派及び説一切有部両派との対論（第 1 偈 c 句）

ある者たち（中観派）は、[所取・能取という] 二つのものが存在しないことは、石女の子のように、断という性質のものであると把握する。別の者たち（説一切有部）は、内的作者⁽¹¹⁵⁾を欠いていることが諸法の空性であると言う。したがって、[中観派の主張するような空性ではない、真実の] 空性の損減を否定するために、また [説一切有部の主張するような無我ではなく] 真実の無我を説示するために、

けれども、そこに空性は存在する (I.1c)

と言う。

1.1.1.4.4 解脱の努力の必要性について（第 1 偈 d 句）

【反論】もし虚妄分別において空性があるなら、そのような場合、あらゆる生類が努力することなく解脱することになってしまう。

【答論】それはあり得ない。なぜなら、

それ（空性）にはまたそれ（虚妄分別）が存在する (I.1d)

からである。なぜなら、空性が浄化されない限り解脱はあり得ず、また [煩悩に] 汚染されたもの（空性）は大変な努力によって浄化されるものであるから、努力なくして解脱することはあり得ないのである。

⁽¹¹⁵⁾ 『中辺論疏』における「内的作者」については、拙稿 [2018: 87, n. 27] を参照。

MAVṬ; Skt. [Ms4a7–4b1 Y12.26–13.6 Bh-T11.17–22 Pa11.15–21]

atha vā lakṣaṇaṃ saṃkleśavyavadānād uktād⁽¹¹⁶⁾ anyan nāstīty ataḥ⁽¹¹⁷⁾ saṃkleśavyavadāna-lakṣaṇapradarśanārtham āha,

[Y13] abhūtapari_[4b1] kalpo 'sti

iti vistaraḥ /

abhūtaparikalpasvabhāvaḥ saṃkleśo bhrāntilakṣaṇatvāt / katham etaj jñātavyaṃ bhrāntilakṣaṇam iti / yena

dvayaṃ tatra na vidyate /

svātmany avidyamānena grāhyagrāhakākāreṇa prakhyānād bhrāntisvarūpeṇa jñāyate⁽¹¹⁸⁾ /

MAVṬ; Tib. [C195b2–4 D195a2–4 G31a6–31b2 N24a2–4 P26a2–5]

yang_[P26a3] na kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba dag gi mtshan nyid brjod pa las gzhan med pas de'i_[G31b] phyir kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba'i mtshan nyid bstan pa'i⁽¹¹⁹⁾ don du /

yang dag ma yin kun rtog_[P26a4] yod //

ces rgya cher_[D195a3] gsungs so //

'khrul pa'i mtshan nyid kyi phyir / yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'i rang bzhin ni kun nas nyon mongs pa'o // 'di 'khrul pa'i mtshan nyid du⁽¹²⁰⁾ ji ltar shes par bya zhe na / 'di_[P26a5] ltar

de la gnyis po yod ma yin //

bdag nyid du med par gzung ba dang 'dzin pa'i rnam_[D195a4] par snang bas 'khrul pa'i ngo bo nyid du mngon no //

⁽¹¹⁶⁾ lakṣaṇaṃ saṃkleśavyavadānalakṣaṇād uktād] Bh-T O Tib : lakṣaṇaṃ saṃkleśavyavadānāyor uktād Mi, lakṣaṇaṃ saṃkleśavyavadānābhīdhanād Y Pa.

⁽¹¹⁷⁾ anyan nāstīty ataḥ Y Pa Mi O : anyan nāsti / tasmāt Bh-T.

⁽¹¹⁸⁾ prakhyānād bhrāntisvarūpeṇa jñāyate Y Pa Mi O : prakhyāte na vyaktaṃ bhrāntirūpatvaṃ Bh-T.

⁽¹¹⁹⁾ bstan pa'i C D N : rtog pa'i G P.

⁽¹²⁰⁾ mtshan nyid du C D N P : mtshan nyid G.

1.1.1.5 第1偈の解釈(4)：雑染相及び清浄相について

1.1.1.5.1 第1偈 a 句を説示する理由

あるいはまた、相はすでに述べた雑染と清浄以外には存在しないので⁽¹²¹⁾、それゆえ、雑染と清浄との相を明示するために、

虚妄分別はある (I.1a)

云々と言う。

1.1.1.5.2 第1偈 b 句を説示する理由

雑染は虚妄分別を自性とする。なぜなら、[雑染は] 迷乱を特徴とするものだからである。

【反論】[雑染に] 迷乱の特徴があるということとは、どうして知られうるのか。

【答論】なぜなら、

そこに二つのものは存在しない (I.1b)

からである。それそのものにおいて存在しない所取・能取の形象を伴って顕現するので、[虚妄分別は] 迷乱を自性とするものとして知られるのである。

⁽¹²¹⁾ 相が、雑染と清浄以外には存在しないことは、〈論の体〉に詳述されている。Cf. 拙稿 [2018: 94–95].

MAVṬ 6.22–7.4:

yadi lakṣyate 'neneti lakṣaṇam ity evaṃ sati lakṣaṇasya saṃkleśavyavadānabhedo bhaved iti naitad evaṃ / svabhāva eva hi bhāvānām lakṣaṇam / tadyathā prthivīdhātuḥ khakkhaṭalakṣaṇo na ca khakkhaṭatvāt prthivīdhātuḥ prthag astīti / atha vā lakṣyate tad iti lakṣaṇam / evaṃ hi saṃkleśo vyavadānaṃ ca saṃkleśavyavadānātmanā lakṣyata iti lakṣaṇam /

【反論】もし『特徴づけるものだから相である』ならば、相は雑染・清浄 [なもの] と区別されるものになってしまう。

【答論】それはそうではない。なぜなら諸存在の自性こそが相だからである。例えば、地界は堅さという相を持っており、地界が堅さと別に存在するのではないように。あるいはまた、特徴づけられるものだから相である。そうであれば、雑染・清浄 [なもの] が [それぞれ] 雑染・清浄という本質によって特徴づけられるから、相なのである。

MAVṬ; Skt. [Ms4b1–2 Y13.6–16 Bh-T11.22–12.3 Pa11.21–29]

idānīm vyavadānasvarūpaparīkṣārtham⁽¹²²⁾ āha,

śūnyatā vidyate tv atra,

iti / śūnyatāsvabhāvaṃ vyavadānaṃ⁽¹²³⁾ *dva*_[4b2]*yābhāvasvabhāvatvāt / atra ca śūnyatāprabhāvitatvāt mārganirodhayor api grahaṇaṃ veditavyaṃ / saṃkleśapakṣād eva vyava*_[Bh-T12]*dānapakṣo mārgayitavyo na punaḥ prthaktvaṃ*⁽¹²⁴⁾ *asyāstīti pradarśanārtham āhātreti / prcchati – yadi dvayaṃ nāsti*⁽¹²⁵⁾, *kasmāt*⁽¹²⁶⁾ *tasyāṃ vidyamānāyāṃ loko bhrānta ity*⁽¹²⁷⁾ *ata āha*⁽¹²⁸⁾,

tasyām api sa vidyate //

iti /

MAVṬ; Tib. [C195b4–6 D195a4–6 G31b2–5 N24a4–7 P26a5–8]

da ni nram par byang ba'i rang gi ngo bo⁽¹²⁹⁾ *brtag pa'i phyir /*

stong pa nyid ni _[P26a6] ***'di la yod //***

ces bya ba gsungs so // gnyis po med pa'i rang bzhin yin pa'i phyir // stong pa nyid kyi rang bzhin ni nram par byang ba'o // stong pa nyid kyi rab tu phye bas lam _[D195a5] *dang 'gog pa dag kyang 'dir* _[P26a7] *bsdu bar rig par bya'o // kun nas nyon mongs pa'i phyogs nyid las nram par byang ba'i phyogs nyid btsal bar bya ba'i*⁽¹³⁰⁾ *rang gi rgyud gud na med par rab tu bstan pa'i phyir 'di la zhes bya ba gsungs so //*

gal te _[P26a8] *gnyis po med na ci'i phyir de yod par 'jig rten* _[D195a6] *'khrul bar gyur zhes*⁽¹³¹⁾ *dris pa dang / de'i phyir*

de la yang ni de yod do

zhes bya ba gsungs te /

(122) °parīkṣārtham] Bh-T Mi O Tib (*brtag pa'i phyir*) : °pradarśanārtham Y Pa cf. MAVṬ 8.16 pradarśanārtham (rab tu bstan pa'i phyir).

(123) *śūnyatāsvabhāvaṃ vyavadānaṃ*] O cf. MAVṬ 13.2 abhūtaparikalpasvabhāvaḥ saṃkleśo bhrāntilakṣaṇatvāt / ('khrul pa'i mtshan nyid kyi phyir / yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'i rang bzhin ni kun nas nyon mongs pa'o //) : *vyavadānaṃ śūnyatāsvabhāvaṃ* Bh-T, *śūnyatāsvabhāvaṃ hi vyavadānaṃ* Mi, *śūnyatāsvabhāvo hi vyavadānaṃ* Y Pa.

(124) prthaktvaṃ Y Pa Mi : prthaktattvaṃ Ms O cf. NC, prthaksattvaṃ Bh-T, prthak svasantāna Stc Tib (rang gi rgyud gud na).

(125) *nāsti* Y Pa Mi O : *na vidyate* Bh-T.

(126) *kasmāt*] Tib (*ci'i phyir*) : *kimathaṃ* Bh-T, *kathaṃ* Y Pa O Mi.

(127) *tasyāṃ vidyamānāyāṃ loko bhrānta ity* Y Pa Mi : *tad astīti lokabhrāntir iti* Bh-T O cf. Tib (*de yod par 'jig rten 'khrul bar gyur*).

(128) *prcchati – ... ata āha*] cf. MAVṬ 122 ity atah prcchati, katham etad daśavidham ātmadarśanam ity ata āha (*de'i phyir phung po la sogs pa la bdag tu lta ba nram pa bcu po de dag ji lta zhe na zhes dris pa dang de'i phyir /*) : prṣṭam atāś cāha Y Mi, syāt praśnaḥ tasmād āha Bh-T, prṣṭam āha Pa.

(129) rang gi ngo bo G N P : ngo bo C D.

(130) bya ba'i C D N : bya'i G P.

(131) zhes C D : ces G N P.

1.1.1.5.3 第1偈c句を説示する理由

次に、清浄の自体を検討するために、

けれども、そこに空性は存在する (I.1c)

と言う。清浄は空性を自性とする。なぜなら、「所取・能取という」二つのものが存在しないことを自性とするからである。また、空性によって特徴づけられたものであるので⁽¹³²⁾、道と滅もこれ（清浄）に包摂されると知るべきである。他ならぬ雑染側から、清浄側は追求されるべきであるが、それ（清浄）に「雑染との」別異性が存在するのではないと示すために⁽¹³³⁾、「そこに」と言う。

1.1.1.5.4 第1偈d句を説示する理由

「もし、「所取・能取という」二つのものが存在しないのであれば、どうしてそれ（空性）が存在するにも関わらず、世間は「所取・能取という二つのものが存在すると」迷乱することになるのであろうか」と問うので、それゆえ、

それ（空性）にはまたそれ（虚妄分別）が存在する (I.1d)

と言う。

⁽¹³²⁾ また、Schmithausen[1969] は、唯識文献における prabhāvita の語義を 4 種に分類する。それを元に金 [2007] は、『中辺論疏』において 22 箇所見られる prabhāvita の用例を文脈に応じて分類している。それに従えば、この箇所の prabhāvita は文脈上「特徴づけられる」と理解すべきである。

⁽¹³³⁾ 蔵訳は「[清浄側に到達したときに] 別に自己の相続が存在するのではないと示すために」(rang gi rgyud gud na med par rab tu bstan pa'i phyir) となっており、雑染と清浄の関係について、別な自己の相続の存在性を否定することをもって説明している。

MAVṬ; Skt. [Ms4b2–4 Y13.17–23 Bh-T12.4–9 Pa11.30–34]

*grāhyagrāhaka*_[4b3] *vikalpaḥ* / *hastyādyākāraśūnyamāyāyām* *iva* *hastyākārādayaḥ* / *abhūtam* *asmin* *dvayaṃ* *parikalpyate* 'nena *vety* *abhūtaparikalpaḥ* /
abhūtavacanena *ca* *yathātra*⁽¹³⁴⁾ *parikalpyate* *grāhyagrāhakaṃ* *tathā* *nāstīti* *pradarśayati*⁽¹³⁵⁾ /
parikalpavacanena *tv* *artho* *yathā* *parikalpyate* *tathā*⁽¹³⁶⁾ *nāstīti* *pradarśa*_[4b4] *yati*⁽¹³⁷⁾ / *evam* *asya*
grāhyagrāhakavinirmuktaṃ *lakṣaṇaṃ* *paridīpitaṃ* *bhavati* /

MAVṬ; Tib. [C195b6–196a1 D195a6–195b1 G31b5–32a1 N24a7–24b2 P26a8–26b3]

gzung ba dang 'dzin pa'i *nam par rtog pa'o* // *sgyu* *ma ni* *glang po*⁽¹³⁸⁾ _[P26b1] *che* *la* *sogs* *pas*
stong *yang* / *glang* *po* *che* *la* *sogs* *par* *snang* *ba* *lta* *bu'o* // *yang* *dag* *pa* *ma* *yin* *pa* *gnyis* *po* *de*
_[D195a7] *la'am* / *des*⁽¹³⁹⁾ *yang* *dag* *pa* *ma* *yin* *pa* *gnyis* *por*⁽¹⁴⁰⁾ *yongs* *su* _[N24b] *rtog* *pas* *yang* *dag* *ma*
_[P26b2] *yin* *kun* *rtog* *pa'o* //

yang *dag* *pa* *ma* *yin* *pa'i* *tshig* *gis* *ni* / *ji* *ltar* 'di *la* *gzung* *ba* *dang 'dzin* *par* *kun* *rtog* *pa* *de* *bzhin* *du*
med *par* *ston* *to* // *kun* *rtog* *pa'i* *tshig* *gis* _[G32a] *ni* *don* _[D195b1] *ji* *lta* *bur* *kun* *rtog* *pa* _{[C196a][P26b3]} *don*
de *lta* *bur* *yod* *pa* *ma* *yin* *zhes* *ston* *te* // *de* *ltar* *gzung* *ba* *dang 'dzin* *pa* *las* *nam* *par* *grol* *ba* *de'i*
mtshan *nyid* *bshad* *pa* *yin* *no* //

⁽¹³⁴⁾ *yathātra* Bh-T O Tib (ji ltar 'di la) : *yathāyaṃ* Ms Y Pa Mi .

⁽¹³⁵⁾ *grāhyagrāhakatvena* *tathā* *nāstīti* *pradarśayati* Y Pa Mi O : *grāhyagrāhakan* *na* *tatheti* *pratipādayati* Bh-T.

Cf. MAVṬ 218.25–219.1 *tasya* *grāhyagrāhakavikalpasya* *jalpākhyasya* *bījādhāratvāt* / (*gzung* *ba* *dang 'dzin* *par* *nam* *par* *rtog* *pa* *de'i* *sa* *bon* *gyi* *rten* *du* *gyur* *pa'i* *phyir* *ro* /).

⁽¹³⁶⁾ *tathā* Bh-T : *tathārtho* Y Pa Mi O.

⁽¹³⁷⁾ *nāstīti* *pradarśayati* : *na* *vidyata* *iti* *pradarśayati* Y Pa Mi O, *na* *bhavatīti* *pratipādayati* Bh-T.

⁽¹³⁸⁾ *glang* *po* C G N P : *gang* *po* D.

⁽¹³⁹⁾ *des* G N P : *des* *yongs* *su* *rtog* *pas* C D.

⁽¹⁴⁰⁾ Skt n.e.

1.1.2 『中辺論釈』第1偈の解釈

1.1.2.1 「虚妄分別」の語義解釈

1.1.2.1.1 第一解釈

〔虚妄分別とは〕所取・能取を分別することである。幻術は象などを欠いているが、象などとして顕現するようにである⁽¹⁴¹⁾。虚妄なる〔所取・能取という〕二つのものが、そこにおいて、あるいはそれによって、分別されるので、「虚妄分別」なのである⁽¹⁴²⁾。

1.1.2.1.1 第二解釈

また、「虚妄」という言葉によって、ここ（＝虚妄分別）において、所取・能取が分別されるようには〔両者は〕存在しないということを〔筆者は〕示している⁽¹⁴³⁾。一方、「分別」という言葉によって、およそ対象が分別されるようには〔その対象は〕存在しないことを示している。以上のように、これ（虚妄分別）には所取・能取を離れた相があると説明された。

⁽¹⁴¹⁾ 三穂野 [2001b: 101, n. 131] も指摘するように、当該梵文と蔵訳の構文が一致しない。両者の趣旨は同様と思われるため、文意の取りやすい蔵訳を採用すべきか。梵文通りに訳すと「象などの形象を欠いている〔幻術で作られた〕幻影において、象などの形象〔が顕現するの〕と同様である」となる。また、伊藤 [2013: 18, n. 7] は、Y の還元案を採用し、hastyākārādayaḥ を hastyādyābhāṣaḥ と訂正して「象などの〔形象の〕顕れるがごとく」と読んでいる。

⁽¹⁴²⁾ 幻術の譬喩は MSA などに見られる。

MSA XI.15, 59.3–8, cf. 本村 [2012]、間中 [2014: 90] など。

yathā māyā tathābhūtaparikalpo nirucyate /

yathā māyākṛtaṃ tadvad dvayabhrāntir nirucyate // 15 //

yathā māyā mantrapariṅhītaṃ bhrānter nimittaṃ kṣāṭhaloṣṭādīkan tathābhūtaparikalpāḥ paratantrasvabhāvo veditavyaḥ / yathā māyākṛtaṃ tasyāṃ māyāyāṃ hastyasvasuvarṇādyākṛtis tadbhāvena pratibhāsītā tathā tasminn abhūtaparikalpe dvayabhrāntir grāhyagrāhakatvena pratibhāsītā parikalpitasvabhāvāvkārā veditavyā /

Trisvabhāvanirdeśa, kk. 28–30, cf. 山口 [1972: 128].

māyākṛtaṃ mantravaśāt khyāti hastyātmanā yathā /

ākāramātraṃ tatrāsti hastā nāsti tu sarvathā // 27 //

svabhāvaḥ kalpito hasti paratantras tadākṛtiḥ /

tatra hastyabhavo `sau pariniṣpanna iṣyate // 28 //

asatkalpas tathā khyāti mūlacittād dvayātmanā /

dvayam atyantato nāsti tatrāsty ākr̥timātrakam // 29 //

mantravan mūlavijñānaṃ kṣāṭhavat tathatā matā /

hastyākāravat eṣṭavyo vikalpo hastivad dvayam // 30 //

BCAP 4.47 ad.

yathā hi māyā hastyākāratayā tadākāraśūnyāpi mantrauśadhaprabhāvād idaṃpratyayatayā mantreṇa tattvarahitāpi pratibhāsate, tathā amī api kleśā viparyāsanimitā ayoniśomanasikārasamudbhūtā idaṃpratītyatāmātrato nistattvā eva prakāśante /

⁽¹⁴³⁾ 小谷 [2017] は以下のように翻訳している。「また、「虚妄」という語によって、そこにおいて所取・能取として分別されるその通りには〔所取・能取は真実には〕存在しないことを示す」。

MAVṬ; Skt. [Ms4b4–5 Y13.23–14.3 Bh-T12.10–14 Pa11.34–12.2]

kaḥ punar asau / atītānāgatavartamānā hetuphalabhūtās traidhātukā anādikālikā nirvāṇaparyava-
sānāḥ *samsārānukūlās*⁽¹⁴⁴⁾ *cittacaittā aviśeṣeṇābhūtaparikalpaḥ*⁽¹⁴⁵⁾ /

[Y14] *viśeṣeṇa*⁽¹⁴⁶⁾ [Pa12] *tu grāhyagrāhakavikalpaḥ / tatra grā*_[4b5]*hyavikalpaḥ, arthasattvapra-*
bhāsaṃ vijñānam / grāhakavikalpa ātmavijñaptipratibhāsam /

MAVṬ; Tib. [C196a1–3 D195b1–3 G32a1–3 N24b2–4 P26b3–6]

de yang gang yin zhe na sems dang sems las byung ba 'das pa dang _[P26b4] ma 'ongs pa dang / da
ltar gyi dang rgyu dang 'bras bur gyur pa dang / _[D195b2] kham s gsum pa dang / thog ma med pa'i
dus can dang mya ngan las 'das pa'i mthar thug pa dang / 'khor ba'i rjes su mthun pa _[P26b5] dag
ni / khyad par med par yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'o //

khyad par ni gzung ba dang 'dzin par⁽¹⁴⁷⁾ rnam par rtog pa'o // de la gzung bar rnam par rtog pa
_[D195b3] ni / don dang sems can du snang ba'i rnam _[P26b6] par shes pa'o // 'dzin par rnam par rtog
pa ni bdag dang rnam par rig par snang ba'o //

⁽¹⁴⁴⁾ *samsārānukūlās*] cf. MAVṬ 186.3 aviparyāsānukūlā (phyin ci ma log pa'i rjes su mthun pa) : *samsārānurūpās* Y
Bh-T Pa Mi O.

⁽¹⁴⁵⁾ *cittacaittā aviśeṣeṇābhūtaparikalpaḥ* Y Pa Mi O : *cittacaitasikā nirviśeṣeṇābhūtaparikalpaḥ* Bh-T.

⁽¹⁴⁶⁾ *viśeṣeṇa*] Pa Mi O : *viśeṣatas* Y, *viśeṣas* Bh-T.

⁽¹⁴⁷⁾ 'dzin par C D : 'dzin pa'i G N P.

1.1.2.2 「虚妄分別」の定義

1.1.2.2.1 一般的意味

【反論】それでは、これ（虚妄分別）はどのようなものか。

【答論】一般的に、虚妄分別とは、過去・現在・未来の心・心所であり、[それらは]原因及び結果となり、三界に属し、無始時来であるが、涅槃で尽き、輪廻に随順するものである。

1.1.2.2.2 個別の意味

一方、個別的には、[虚妄分別とは]所取・能取の分別である。そのうち、所取の分別とは、対象や衆生として顕現する識であり、能取の分別とは、自我や識別として顕現する[識]である⁽¹⁴⁸⁾。

⁽¹⁴⁸⁾ ここで説示されている、所取・能取それぞれの分別の内容である、対象・衆生・自我・識別はのちの第3偈において詳述される。安慧はその説明を先取りして、当該の虚妄分別の個別の意味の解説に取り入れていると思われる。

MAVBh 18.21-19.4:

**arthasattvātmavijñaptipratibhāsaṃ prajāyate /
vijñānaṃ nāsti cāsyārthas tadabhāvāt tad apy asat // I.3**

tatrārthapratibhāsaṃ yad rūpādibhāvena pratibhāsat / sattvapratibhāsaṃ yat pañcendriyatvena svapara-santānayoḥ / ātmapatibhāsaṃ kliṣṭaṃ manaḥ / ātmamohādisamprayogāt / **vijñaptipratibhāsaṃ** ṣaḍ vijñānāni / **nāsti cāsyārtha** iti / arthasattvapratibhāsaśyānākāratvāt / ātmavijñaptipratibhāsaśya ca vitathapratibhāsatvāt / **tad-abhāvāt tad apy asat** iti, yat **tad** grāhyaṃ rūpādi pañcendriyaṃ manaḥ ṣaḍvijñānaśamjñakaṃ caturvidhaṃ tasya grāhyasyārthasyābhāvāt **tad api** grāhakaṃ vijñānaṃ **asat** /

(1) 対象・(2) 衆生・(3) 自我・(4) 識別として顕現する識が生じる。

しかし、こ【の識】の対象は存在しない。前者（対象）が存在しないから、後者（識）もまた存在しない。(I.3)

そのうち、「(1) 対象として顕現する[識]」とは、およそ色など（五境）として顕現する識である。「(2) 衆生として顕現する[識]」とは、自・他の相続において五根として[顕現する識]である。「(3) 自我として顕現する[識]」とは、染汚意である。我痴などと相応するからである。「(4) 識別として顕現する[識]」とは、六識である。「しかし、こ【の識】の対象は存在しない」とは、対象や衆生としての顕現は行相（ākāra）をもたないから、また自我や識別の顕現は非真実の顕現だからである。「前者（対象）が存在しないから後者（識）もまた存在しない」とは、そ【の識】の所取は、色など【の六境】と、五根と、[染汚]意と、六識と言われるものの四種であるが、「前者」すなわち所取である対象が存在しないから、「後者」すなわち能取である識もまた存在しないのである。

MAVT; Skt. [Ms4b5-6 Y14.3–9 Bh-T12.14–20 Pa12.3–8]

dvayaṃ grāhyaṃ grāhakaṃ c[eti]⁽¹⁴⁹⁾ tatra grāhyaṃ rūpādi / grāhakaṃ cakṣurvijñānādi / **grāhyagrāhakahāvena virahitatā**⁽¹⁵⁰⁾, viviktatā hy⁽¹⁵¹⁾ **abhūtaparikalpasya sūnyatā**, na tv **abhūtaparikalpo** 'pi nāsti⁽¹⁵²⁾ / yathā sūnyā rajju_[4b6]ḥ⁽¹⁵³⁾ sarpatvabhāvenātatsvabhāvāt⁽¹⁵⁴⁾ sarvakālaṃ sūnyā, na tu rajjuḥ svabhāvena, tatthehāpi / **tasyām api sa vidyata** ity **abhūtaparikalpaḥ** / evaṃ hy āgantukāvaraṇopakliṣṭatvāt tadagrahaṇam uktam **abdhātvādivad iti**⁽¹⁵⁵⁾ /

MAVT; Tib. [C196a3–6 D195b3–6 G32a3–6 N24b4–6 P26b6–27a2]

gnyis po ni gzung ba dang 'dzin pa'o zhes bya ba de la gzung ba ni gzugs la sogs pa'o // 'dzin pa ni mig _[P26b7] gi nram par shes pa la sogs pa'o //

_[D195b4] gzung ba dang 'dzin pa'i dngos po dang *bral ba nyid de / dben pa nyid ni yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'i stong pa nyid yin gyi / yang dag pa ma yin pa kun rtog pa* _[P26b8] yang med pa ni ma yin te / dper na thag pa ni sprul pa'i⁽¹⁵⁶⁾ dngos pos stong ste / de'i rang bzhin ma yin pas dus thams cad _[D195b5] du stong pa nyid yin gyi / thag pa'i dngos po ni ma yin te / 'dir yang de bzhin no //

_[P27a1] **de la yang ni de yod do** zhes bya ba ni yang dag pa ma yin pa kun rtog pa ste / de ltar glo bur gyi sgrib pas nyon mongs pa'i phyir / *de chu*'i⁽¹⁵⁷⁾ *khams la sogs pa bzhin du rtogs par mi rung ngo* _[P27a2] zhes bstan pa _[D195b6] yin no //

⁽¹⁴⁹⁾ ceti Y Pa Mi Tib (zhes bya ba) : ca Ms Bh-T O.

⁽¹⁵⁰⁾ **grāhyagrāhakahāvena virahitatā** Na Pa Mi O : **grāhyagrāhakahāvena rahitatā** Y, **grāhyagrāhakahāvarahitatā** Bh-T.

⁽¹⁵¹⁾ viviktatā hy Y Pa Mi O : rahitatā Bh-T.

⁽¹⁵²⁾ na tv **abhūtaparikalpo** 'pi nāsti : na tv **abhūtaparikalpo** 'py **abhāvaḥ** Y Pa Mi, na khalv **abhūtaparikalpo** 'pi na bhavati Bh-T.

⁽¹⁵³⁾ yathā sūnyā rajjuḥ Y Pa Mi O : yathā rajjuḥ sūnyā Bh-T.

⁽¹⁵⁴⁾ sarpasvabhāvenātatsvabhāvāt] Ms O cf. NC : sarpasvabhāvena tatsvabhāvatvābhāvāt Bh-T Mi Tib (sbrul pa'i dngos pos stong ste / de'i rang bzhin ma yin pas), sarpasvabhāvenātatsvabhāvatvāt Y Pa.

⁽¹⁵⁵⁾ **abdhātvādivad iti** Pa Mi O : **ābdhātvādivad iti** Y, **iti pratipāditam** Bh-T.

⁽¹⁵⁶⁾ sbrul pa'i D : sbrul gyi C G N P.

⁽¹⁵⁷⁾ chu'i G N P : chu C D.

1.1.2.3 虚妄分別と空性との関係

1.1.2.3.1 空性と所取・能取との関係

二つのものとは所取と能取とであるというのに関して、そのうち、所取は色など〔の六境〕であり、能取は眼識など〔の六識〕である。

〔空性とは、その虚妄分別が〕所取・能取というあり方を離れていることである。実に、〔虚妄分別が所取・能取というあり方を〕遠離していることが、虚妄分別の空性であるが、虚妄分別〔そのもの〕までもが存在しないのではない。例えば、繩は蛇性というあり方で空であり、それ（蛇）の自性を持つことがないので、常に空であるが、繩は自性としては〔空では〕ない⁽¹⁵⁸⁾。この場合も同様である。

それにはまたそれが存在するとは、〔空性においても〕虚妄分別が〔存在すること〕である。実に、以上のようにそれ（空性）は外来的な障害によって汚染されているので、把握されないことは、「〔清浄なる〕水界などと同様に」とすでに説かれているのである⁽¹⁵⁹⁾。

⁽¹⁵⁸⁾ 藏訳は「繩の自性は〔空では〕ない」(thag pa'i dngos po ni ma yin te) と理解している。

⁽¹⁵⁹⁾ 水界の譬喩については、先述の、『中辺論頌』に対する第一解釈の d 句の解説を参照 (MAVT 11.7–9)。

MAVT; Skt. [Ms4b7–5a1 Y14.10–17 Bh-T12.20–13.1 Pa12.8–13]

evaṃ yad yatra nāsti tat tena śūnyam iti yathābhūtaṃ samanupaśyatīti⁽¹⁶⁰⁾ / *kiṃ kutra*⁽¹⁶¹⁾ / *nāstīti*⁽¹⁶²⁾ / *abhūtaparikalpe* dvayam, ato 'bhūtaparikalpaṃ dvayena śūnyam paśyati / *yat punar atrāvaśiṣṭam*⁽¹⁶³⁾ / *tat sat* / *kiṃ punar ihāvaśiṣṭam*⁽¹⁶⁴⁾ / *abhūtaparikalpaḥ śūnyatā ca* / *tadubhayam ihāstīty anādhyāropānapavādena paśyan*⁽¹⁶⁵⁾ / *yathābhūtaṃ prajānāti*⁽¹⁶⁶⁾ / *tatrābhūtaparikalpe dvayābhāvadārśanād anadhyāropaḥ*⁽¹⁶⁷⁾ / *abhūtaparikalpasya* [Bh–T13] *śūnyatā*_[5a1] *yāś*⁽¹⁶⁸⁾ *cāstitvadārśanād*⁽¹⁶⁹⁾ *anapavādaḥ* /

MAVT; Tib. [C196a6–196b1 D195b6–196a1 G32a6–32b3 N24b6–25a2 P27a2–5]

de ltar gang na gang med pa de ni / des stong par yang dag par [G32b] *rjes su mthong ngo zhes bya ba la / ci zhig gang na med ce na / yang dag pa ma yin pa kun rtog pa la gnyis po ste / de'i* [P27a3] *phyir yang dag pa ma yin pa kun rtog pa la gnyis kyi stong par mthong ngo //* *'di la lhag ma* [D195b7] *gang yin pa de ni yod pa de*⁽¹⁷⁰⁾ *'di la*⁽¹⁷¹⁾ *lhag ma gang yin zhe na // yang dag pa ma yin pa kun rtog pa*⁽¹⁷²⁾ *stong pa nyid dang*⁽¹⁷³⁾ / [P27a4] *de gnyi ga* [N25a] *yang 'dir yod par ma skur ba*⁽¹⁷⁴⁾ *dang / sgro btags pa med par mthong na yang dag par ji lta ba bzhin du rab tu shes so // de la yang dag pa ma yin pa kun rtog pa la gnyis po* [C196b][D196a1] *med par mthong ba'i phyir sgro mi* [P25a5] *'dogs so // yang dag pa ma yin pa kun rtog pa dang stong pa nyid yod par mthong ba'i* *phyir te / skur ba mi 'debs te /*

⁽¹⁶⁰⁾ *evaṃ yad yatra nāsti tat tena śūnyam iti yathābhūtaṃ samanupaśyatīti* Na Mi O : *evaṃ yasmin yan nāsti tat tena śūnyam iti samanupaśyatīti* Y, *evaṃ yatra yan nāsti tat tena śūnyam iti samyag anupaśyatīti* Bh-T.

⁽¹⁶¹⁾ *kiṃ kutra* Pa : *kiṃ kasmin* Y Mi O, *kutra kiṃ* Bh-T.

⁽¹⁶²⁾ *nāstīti* Bh-T : *nāsti* Y Pa Mi O.

⁽¹⁶³⁾ *yat punar atrāvaśiṣṭam* Na Y Pa Mi O : *yat punar ihāvaśiṣṭam* Bh-T.

⁽¹⁶⁴⁾ *ihāvaśiṣṭam* em. Y Bh-T Pa Mi O : *ihāvaśiṣṭaḥ* Ms.

⁽¹⁶⁵⁾ *paśyan* Y Pa Mi O : *paśyatyataḥ* Bh-T.

⁽¹⁶⁶⁾ *yathābhūtaṃ prajānāti* Na Mi O : *yathā bhūtaṃ prajānāti* Y, *samyagyathāvat prajānāti* Bh-T.

⁽¹⁶⁷⁾ *dvayābhāvadārśanād anadhyāropaḥ* : *'dvayadarśanād anadhyāropaḥ* Y Pa Mi O, *'dvayaṃ na vidyate iti darśanād anadhyāropaḥ* Bh-T.

⁽¹⁶⁸⁾ *abhūtaparikalpasya śūnyatāyāś* Y Pa Mi O : *abhūtaparikalpaḥ śūnyatā* Bh-T.

⁽¹⁶⁹⁾ *cāstitvadārśanād* Ms Y Pa Mi O : *cāstīti darśanād* Bh-T.

⁽¹⁷⁰⁾ *yod pa de* C D N : *yod de* G P.

⁽¹⁷¹⁾ *la* C D : *las* G N P.

⁽¹⁷²⁾ *rtog pa* D : *rtog pa dang* C G N P.

⁽¹⁷³⁾ *stong pa nyid dang* D : *stong pa nyid do* C G N P.

⁽¹⁷⁴⁾ *ma skur ba* C D N P : *skur ba* G.

1.1.2.3.2 不顛倒なる空性の相

1.1.2.3.2.1 空性の定型句の解説

XがYに存在しないとき、YはXという点で空である、とありのままに観察するというのに
関して、

【反論】何が、どこに存在しないのか。

【答論】[所取・能取という]二つのものが虚妄分別において[存在しないの]である。それゆえ、虚妄分別は[所取・能取という]二つのものという点で空であると[行者は]見る。

一方、まだここ(Y)に何らかの残されたもの(Z)があるならば、それ(Z)は存在するものとして[という]⁽¹⁷⁵⁾。

【反論】では、ここで「残されたもの」とは何か。

【答論】虚妄分別と空性とである。

その両者がここ(Y)にあると、増益したり損減したりすることなく見るならば、ありのままに了知するのである。

それら(増益と損減)のうち、虚妄分別において[所取・能取という]二つのものが存在しないことを見るので、増益することはなく、また虚妄分別と空性とが存在すると見るので、損減することもないのである。

⁽¹⁷⁵⁾ 当該の『中辺論釈』を引用する部分の蔵訳が、『中辺論釈』そのものの蔵訳と一致しない (MAVBh (Tib): 'di la lhag ma yod pa gang yin pa de ni)。

MAVṬ; Skt. [Ms5a1–2 Y14.18–22 Bh-T13.1–6 Pa12.13–17]

aviparītaṃ śūnyatālakṣaṇam udbhāvitam bhavati⁽¹⁷⁶⁾ / yac chūnyam tasya sadbhāvāt, yena śūnyam tasya tatrābhāvāt, sarvabhāve sarvābhāve⁽¹⁷⁷⁾ vā nāviparītaṃ⁽¹⁷⁸⁾ śūnyatālakṣaṇam, śūnyatāyā evābhāvaprasaṅgāt / na śūnyam ity abhāve śūnyatā⁽¹⁷⁹⁾ yujyate⁽¹⁸⁰⁾, dharmatāyā hi bhāvāyattatvād anityatvādivat⁽¹⁸¹⁾ / dvayam astīti cet⁽¹⁸²⁾ śūnya_[5a2]tābhāvaḥ /

MAVṬ; Tib. [C196b1–3 D196a1–3 G32b3–5 N25a2–3 P27a5–8]

stong pa⁽¹⁸³⁾ gang yin pa de yod pa dang gang gis stong pa de de la med pa'i phyir / stong pa nyid kyī _[P27a6] mtshan nyid _[D196a2] phyin ci ma log par bstan pa yin no // thams cad med pa 'am thams cad yod pa ni stong pa nyid kyang mtshan nyid phyin ci log yin te / stong pa nyid med par 'gyur ro // stong _[P27a7] pa zhes bya ba med na stong pa nyid du mi rung ste / chos nyid ni dngos po la rag lus pa'i phyir mi rtag pa nyid la _[D196a3] sogs pa bzhin no // gnyis po yod do zhe na / stong pa nyid med par 'gyur _[P27a8] ro //

⁽¹⁷⁶⁾ udbhāvitam bhavati Ms Y Pa Mi O : udbhāvitam Bh-T.

⁽¹⁷⁷⁾ sarvabhāve sarvābhāve Ms Y Pa St O : sarvabhāvaḥ sarvābhāvo Bh-T Mi Tib (thams cad med pa 'am thams cad yod pa ni).

⁽¹⁷⁸⁾ vā nāviparītaṃ Y Pa O : tu nāviparītaṃ Ms St, vā viparītaṃ Bh-T Mi Tib (phyin ci log yin te).

⁽¹⁷⁹⁾ śūnyam ity abhāve śūnyatā Bh-T Mi Tib (stong pa zhes bya ba med na stong pa nyid du) : śūnyasamjñāyām asatyām śūnyatā Y O, śūnyasamjñā 'satyām śūnyatāyām Pa.

⁽¹⁸⁰⁾ na ... yujyate Bh-T Pa Mi cf. MAVṬ 11.20 na ... yujyate (mi rung ngo) : na ... yogyā Y O.

⁽¹⁸¹⁾ dharmatāyā hi bhāvāyattatvād anityatvādivat Y Pa Tib (chos nyid ni dngos po la rag lus pa'i phyir mi rtag pa nyid la sogs pa bzhin no) : dharmatā hi bhāvāyattatayā nityatvādiḥ Bh-T. Cf. MAVṬ 153.1–2 samasamvartanīyakarmāyattatā (mnyam par 'gyur ba ma yin pa'i las la rag lus pas).

⁽¹⁸²⁾ dvayam astīti cet Bh-T Mi Tib (gnyis po yod do zhe na) cf. MAVṬ 44.5 atra tūpanayahetur nirartham iti cet ('dir nye bar khrid pa'i rgyu ni don med do zhe na) : dvayam astīti Y Pa O.

⁽¹⁸³⁾ stong pa G N P : stong pa nyid C D.

1.1.2.3.2.2 不顛倒なる空性の相に関する中観派及び説一切有部両派との対論

空性の相が顛倒なく明らかに示されたのである[というのに]、空であるもの(X)が実在し、[そのXが]それ(Y)に関して空であるとき、それ(Y)はそこ(X)に実在しないから⁽¹⁸⁴⁾、[説一切有部が主張するような]一切[法]が存在するなら、あるいは[中観派が主張するような]一切[法]が存在しないなら、不顛倒なる空性の相はない。なぜなら、他ならぬ空性が存在しないことになってしまうからである。

【中観派に対する論難】空であるものが存在しないのであれば、空性は不合理となる。なぜなら、[空性と同義である]法性は無常性などのように実在に依存するものであるからである⁽¹⁸⁵⁾。

【説一切有部に対する論難】[所取・能取という]二つのものが存在するというのであれば、空性は存在しないことになる。

(184) この abl. で示される理由句について、蔵訳や山口は、直前の『中辺論釈』の引用文にかけて理解している。ここでは、文脈上後続の文章 (sarvabhāve sarvabhāve vā nāviparīṭaṃ śūnyatālakṣaṇaṃ) にかけて理解した。この理解は三穂野や小谷が支持している。

(185) Cf. MAVBh 23.5–9:

etac ca śūnyatāyā lakṣaṇam / tasmād abhūtaparikalpān

na prthaktvaikalakṣaṇam //

prthaktve sati dharmād anyā dharmateti na yujyate / anityatāduḥkhatāvat /

また、この空性の特徴は、かの虚妄分別と、

異っており、同一である、というような特徴ではない。(I.13d)

[空性が虚妄分別と] 異なっているならば、法性は法とは別なものになってしまうから [それは] 不合理である。無常性と苦性のごとくである。

MAVT 48.10–22:

na prthaktvaikalakṣaṇam //

prthaktve sati dharmād anyā dharmateti na yujyate, kaḥ punar ayogaḥ, dharmād vibhinnalakṣaṇatvād dharmatā dharmāntaram eva bhavati tadanyadharmaavat / na ca dharmāntaran dharmāntarasya dharmatā bhavituṃ arhati, tatra punar dharmāntaram anveṣṭavyam ity anavasthāprasariḡaḥ / anityatāduḥkhatāvad iti, yathānityatānityebhyo nānyā duḥkhatā ca duḥkhād evaṃ śūnyatāpi na śūnyād anyeti /

異っており、同一である、といった特徴ではない。(I.13d)

[空性が虚妄分別と] 異なっているならば、法性は法とは別なものになってしまうから [それは] 不合理である。けれども、何が理にかなわないのか。法とは異なった特徴であるから、まさに法性は別な法となる。その他の法のごとくである。さらに、別な法は別な法についての法性となることはできない。その場合、さらに別な法を求めるべきであるという不安定な過失(無窮の過失)となる。「無常性と苦性のごとく」とは、無常性は無常と別ではなく、また、苦性も苦とは[別ではない]ように、同様に空性も空とは別ではないのである。

MAVṬ; Skt. [Ms5a2–3 Y14.22–15.3 Bh-T13.6–13 Pa12.17–22]

yadi śaśaviṣāṇakalpam eva⁽¹⁸⁶⁾ dvayam, katham tenābhūtaparikalpasya śūnyatāsambhavaḥ / anyena hy anyasya śūnyatā dṛṣṭā, yathā bhikṣubhir vihārasya⁽¹⁸⁷⁾ / naitad evam⁽¹⁸⁸⁾ / yathā⁽¹⁸⁹⁾ rajjur māyā vā svātmāny avidyamānena sarpākāreṇa *puruṣādinā*⁽¹⁹⁰⁾ vā⁽¹⁹¹⁾ *prakhyāyate*⁽¹⁹²⁾, *tatra kasyacid grāhavyāvartanārthaṃ*⁽¹⁹³⁾ *sarpaena puruṣādinā* ca / *sarpapuruṣādinā* [5a3][Y15] ca⁽¹⁹⁴⁾ śūnyety ucyate, evam abhūtaparikalpo 'pi svātmāny avidyamānena grāhyagrāhakākāreṇa prakhyāyamāno bālānān tadgrahābhīniveśatyājanārthaṃ⁽¹⁹⁵⁾ dvayena śūnya ity⁽¹⁹⁶⁾ ucyate /

MAVṬ; Tib. [C196b3–5 D196a3–5 G32b5–33a2 N25a3–6 P27a8–27b3]

gal te gnyis po ni ri bong gi rwa⁽¹⁹⁷⁾ dang 'dra na yang ji ltar des yang dag pa⁽¹⁹⁸⁾ ma yin pa kun rtog pa stong ste / dper na dge slong rnam kyis gtsug lag khang bzhin du gzhan gyis [P27b1] gzhan stong par mthong [D196a4] zhe na / dper na thag pa la 'am sgyu ma⁽¹⁹⁹⁾ bdag nyid kyis med par sbrul gyi rnam pa dang *skyes bu la sogs pa lta bur snang ba de la kha cig 'dzin pa bzlog pa'i phyir* / [P27b2] *sbrul dang skyes* [G33a] *bu la sogs pas* stong ngo zhes brjod pa de bzhin du / yang dag pa ma yin pa kun⁽²⁰⁰⁾ rtog pa la yang [D196a5] bdag nyid kyis med par gzung ba dang 'dzin pa'i rnam par snang ba'i⁽²⁰¹⁾ de la byis pa rnam [P27b3] 'dzin cing mngon par zhen pa dor bar bya ba'i phyir gnyis kyis stong zhes bshad do //

(186) śaśaviṣāṇakalpam eva] Ms Bh-T St Mi O cf. NC : śaśaviṣāṇakalpanena Y Pa.

(187) vihārasya] Ms Bh-T Pa St Mi O : vihāraṃ syān Y.

(188) Tib n.e.

(189) yathā Ms Y Pa O : yathā ca Bh-T Mi.

(190) *puruṣādinā* Y Pa Mi O : *puruṣādineva* Bh-T.

(191) vā] Pa Mi O Tib (sbrul gyi rnam pa dang *skyes bu la sogs pa*) : om. Y, ca Bh-T.

(192) *prakhyāyate*] Bh-T cf. MAVṬ 15.2 prakhyāyamāno (snang ba) : *prabhāsate* Y Pa O.

(193) *grāhavyāvartanārthaṃ*] cf. MAVṬ 53.11 ātmīyasnehagrāhavyāvartanārthaṃ (bdag gir chags pa dang 'dzin pa bzlog pa'i phyir) : *grāhanirvartanārthaṃ* Y Bh-T Pa Mi O.

(194) ca] Ms* Bh-T Mi : om. Y Pa O. *Ms (°ś ca).

(195) tadgraha°] Ms Bh-T Mi O cf. NC : tadgrāha° Y Pa.

(196) śūnya ity] Ms St O cf. NC : śūnyam ity Y Bh-T Pa.

(197) rwa C G N P : ra D.

(198) yang dag pa C G P : yang dag D N.

(199) sgyu ma G N P : sgyu ma la C D.

(200) kun G N P : kun du C D.

(201) snang ba'i G N P : snang ba C D.

【説一切有部による反論】仮に「所取・能取という」二つのものが、まさに兎の角のごとく「非存在」であるとすれば、どうしてそれ（二つのものという非存在）の点で、虚妄分別が空性であることがありうるのか。実に、比丘たちという点で僧院「が空っぽであることが経験される」ように⁽²⁰²⁾、あるもの（Y）という点で別のもの（X）が空であることが経験されるのである。

【答論】そのようなことはありえない。例えば、縄や幻術が、それら自身には存在しない蛇の形象や人などとして顕現する「場合」、それに誰かが執着することを排除するために、「[縄や幻術は] 蛇や人などという点で空である」と言われるように、同様に、虚妄分別も、それ自身には存在しない所取・能取の形象を伴って顕現する場合に、愚者たちがそれ（顕現した所取・能取の形象）を把握し執着することを捨て去らせるために、「[虚妄分別は所取・能取という] 二つのものという点で空である」と述べるのである。

⁽²⁰²⁾ 『小空経』に見られる僧院の比喩は以下の通りである。Cf. 袴谷 [1984], 三穂野 [2001b].

Majjhima-Nikāya 121 *Cūlasuññatasuttanta* 104.15–18:

Seyyathāpi ānanda, ayaṃ Migāramātupāsādo suñño hatthigavāssavaḷavena, suñño jātarūparajātēna, suñño itthi purisasannipātēna, atthi cevidaṃ asuññataṃ yadidaṃ bhikkhusaṅghaṃ paṭicca ekattaṃ.

たとえば、アーナンダよ、このミガーラマター殿堂は象・牛・馬・牝馬について空であり、金・銀について空であり、女性・男性の集合について空です。ただ、この不空性のみが、すなわち比丘僧団による一性があります。（片山 [2001: 348] 参照）

一次文献・略号（『中辺論釈』及び『中辺論疏』に関するものは、本稿「使用テキスト」を参照されたい）

BBh

BBh^D *Yogācārabhūmau Bodhisattvabhūmi*, ed. by Nalinaksha Dutt, *Bodhisattvabhūmi, Being the XVth Section of Asangapada's Yogācārabhūmi*, K.P.Jayaswal Reserch Institute, Patna, 1966.

BBh^W *Yogācārabhūmau Bodhisattvabhūmi*, ed. by Unrai Wogihara, *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, Seigo Kenkyukai, 1936. : repr. by 山喜房佛書林.

BCAP *Bodhicaryāvatārapañjikā* (Prajñākaramati), ed. by P. L. Vaidya, *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā*, Buddhist Sanskrit Texts 12, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.

C Cone edition.

D Derge edition.

G Golden edition.

MSA *Mahāyānasūtrālaṃkārakārikā* (Maitreya), see MSABh.

MSABh *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (Vasubandhu), ed. by Sylvain Lévi, *Mahāyānasūtrālaṃkāra*, Honoré Champion, Paris, 1907.

MSAT *Mahāyānasūtrālaṃkāratikā*, D4029, P5530.

MW M. Monier[1982]

N Narthang edition.

NC 長尾 [1978]

n.e. no equivalent in

P Peking edition.

SAVBh *Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya*, D4034, P5531.

St Stanley[1988]

Stc Stcherbatsky[1936]

TrBh *Triṃśikā-bhāṣya* (Sthiramati), ed. by Sylvain Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśatikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, Paris, 1925. ed. by H. Buescher, *Sthiramati's Triṃśikāvijñapti-bhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien, 2007.

二次資料

Anacker, Stefan

- [1984] *Seven Works of Vasubandhu: The Buddhist Psychological Doctor*, Motilal Banarsidass, Delhi.

Friedmann, David Lasar

- [1937] *Madhyāntavibhāgaṭīkā: Analysis of the Middle Path and the Extremes*, Utrecht: Utr. Typ. Ass.

Williams, M. Monier

- [1982] *Sanskrit-English Dictionary*, Oxford University Press, Oxford.

Obermiller, Engene

- [1933] “Review of *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṭīkā* of Sthiramati: Being a Sub-Commentary on Vasubandhu’s *Bhāṣya* on the *Madhyāntavibhāgasūtra* of Maitreya-nātha, ed. by Vidhushekhara Bhattacharya & Giuseppe Tucci”, *The Indian Historical Quarterly*, Vol. IX, No. 3, pp. 1019–1030

Schmithausen, Lambert

- [1969] *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Vinīścaya-saṃgrahanī der Yogācārabhūmiḥ*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Sitzungsberichte, 264. Band, 2. Abhandlung, Hermann Böhlau, Wien.

Stanley, Richard

- [1988] *A Study of the Madhyāntavibhāga-bhāṣya-ṭīkā*, Ph. D. Dissertation, Australian National University.

Stcherbatsky, Theodore

- [1936] *Madhyānta-vibhāga: Discourse on Discrimination Between Middle and Extremes / Ascribed to Bodhisattva Maitreya and Commented by Vasubandhu and Sthiramati; Bibliotheca Buddhica 30; repr. by Motilal Banarsidas Publishers, Delhi, 192.*

Thomas, Kochumuttom

- [1982] *A Buddhist Doctrine of Experience*, Motilal Banarsidass, Delhi.

伊藤康裕

- [2010] 「安慧の唯識説の一考察—虚妄分別と二取との関係を中心に」『東洋の思想と宗教』27, pp. 46–63.

- [2013] 「安慧の唯識説における認識論」早稲田大学博士学位請求論文。

小谷信千代

- [2017] 『虚妄分別とは何か—唯識説における言葉と世界—』法蔵館。

片岡 啓

- [2017] 「パラフレーズによる *abhūtaparikalpa* の構造分析」『インド論理学研究』X, pp. 25–41.

片山一良

[2001] 『パーリ仏典 中部（マッジマ ニカーヤ） 後分五十経篇 I』 大蔵出版。

北山祐誓

[2018] 「『中辺分別論』及び『中辺分別論釈疏』〈論の体〉校訂テキスト及び翻訳研究」『インド学チベット学研究』 23, pp. 80–109.

金 才権

[2007] 「『中辺分別論釈疏』における prabhāvita の語義」『印度学仏教学研究』 55-2, pp. 75–78.

金 俊佑

[2017] 「虚妄分別という複合語に対する二つの解釈」『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』 45, pp. 19–34.

[2019] 「中辺分別論における空性の研究」佛教大学博士学位請求論文。

間中 充

[2014] 「幻喩と三性説—『大乘莊嚴經論』第 XI 章 13–30 偈をめぐって—」『龍谷大学仏教学研究室年報』 18, pp. 19–38.

高橋晃一

[2005] 『『菩薩地』『真実義品』から「摂決択分中菩薩地」への思想展開—vastu 概念を中心として—』山喜房佛書林。

長尾雅人

[1962] 「中辺分別論の梵文写本」『東方學論集東方學會創立十五周年記念』東方学会, pp. 182–193.

[1968] 「余れるもの」『印度学仏教学研究』 16-2, pp. 23–27.

[1978] 「『中辺分別論安慧釈』の梵写本との照合—その第一章相品について—」『鈴木学術財団研究年報』 15, pp. 16–22.

袴谷憲昭

[1984] 「空性理解の問題点」『理想』 610, pp. 50–64.

松岡寛子

[2007] 「スティラマティ著『中辺分別論釈疏』〈帰敬偈〉のテキスト校訂及び和訳」『比較論理学研究』 4, pp. 101–136.

水尾寂芳

[1983] 「瑜伽行学派における空性説の展開」『待兼山論叢 哲学篇』 17, pp. 21–37.

三穂野英彦

[2001a] 『Madhyāntavibhāga 第 1 章相品における理論と実践』 Vol. I, 広島大学博士学位請求論文。

[2001b] 『Madhyāntavibhāga 第 1 章相品における理論と実践』 Vol. II, 広島大学博士学位請求論文。

向井 亮

- [1974] 「『瑜伽論』の空性説—『小空経』との関連において—」『印度学仏教学研究』22-2, pp. 900–907.

本村耐樹

- [2012] 「『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喩における「存在するもの」」『印度学仏教学研究』61-1, pp. 396–391.

山口 益

- [1935] 『安慧阿闍梨耶造・中辺分別論釈疏』破塵閣. repr. 鈴木学術財団 1966.

- [1937] 『漢藏対照弁中辺論：付・中辺分別論釈疏梵本索引』破塵閣. repr. 鈴木学術財団 1966.

- [1972] 「世親造説三性論偈梵藏本及びその注釈的研究」『山口益仏教学論集上』、春秋社。

葉 阿月

- [1975] 『唯識思想の研究—根本真実としての三性説を中心として—』国書刊行会。

Chapter I <Lakṣaṇapari-ccheda> of the *Madhyāntavibhāgabhāṣya* and *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (1):

Text and Annotated Translation

Summary

This paper presents a critical edition and annotated translation of the first chapter <Lakṣaṇapari-ccheda> of the *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (MAVBh) and *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (MAVṬ).

This paper deals in detail with the section on *sadasallakṣaṇa* of the first chapter <Lakṣaṇapari-ccheda>. *Madhyāntavibhāga* I-1 has reached considerable popularity and is often quoted in the literature of not only the Yogācāra school but also later Buddhist schools.

The extant Sanskrit manuscript of MAVṬ is damaged and incomplete, about one third of it is missing. Yamaguchi restored the missing parts by reconstructing the Sanskrit text from the corresponding Tibetan translation but Yamaguchi's reconstruction is not always perfect; the edition created Bhattacharya-Tucci at times gives better reconstructions. I tried to improve Yamaguchi's edition by recovering possible Sanskrit words, phrases and sentences from the portions of this text available in Sanskrit and carefully re-examining the extant Sanskrit manuscript.

キーワード 『中辺分別論』、『中辺分別論積疏』、世親、安慧、虚妄分別